西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書（16）

過疎基幹農道整備事業（平山２期地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

牧　野　遺　跡

２００６年３月

鹿児島県西之表市教育委員会

序　文

種子島は、黒潮海流の中に位置し、低平な大地と数多くの小川があり、照葉樹林が繁茂し、古くから自然の恵みを受け豊かな環境のもとにあることから、島の各所から遺跡が数多く発見されています。

この牧野遺跡は、過疎基幹農道整備事業に伴い、西之表市教育委員会が主体となり、発掘調査を実施したものであります。

本遺跡からは、縄文時代早期の土器の他にも、石鏃、石匙、磨製石斧などの石器類が出土しており、近くにも同時期の遺跡があり、さらに種子島各地からも同時期の遺跡がみつかることから、ある程度の人々が島に渡ってきていたものと思われます。

この遺跡に立つと、眼下に太平洋が望まれ、後背地には豊かな照葉樹林帯が広がり、古代から狩猟生活に適した環境であったことがわかります。

本報告書が学術的文献として活用されるのはもとより、市民の文化財保護意識高揚の一助となることを念じる次第であります。

最後に、本報告書を刊行するにあたり、ご協力いただきました鹿児島県教育庁文化財課及び同県立埋蔵文化財センターをはじめ、安城地区の関係者、熊毛支庁土地改良課、さらに貴重なご助言をいただきました諸先生方に対して厚くお礼申し上げます。

平成18年3月

西之表市教育委員会教育長　有島正之

報　告　書　抄　録

ふりがな	まきの　いせき
書名	牧野遺跡
副書名	過疎基幹農道整備事業（平山２期地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	16
編集者名	沖田純一郎
編集機関	西之表市教育委員会
所在地	〒891 - 3193 鹿児島県西之表市西之表７６１２番地
発行年月日	２００６年3月２５日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
牧野遺跡	鹿児島県 西之表市 安城平山 牧野	462136	８７	30° 39′ 42″	131° 03′ 11″	確認調査 20031003 ～ 20031106 緊急調査 20040705 ～ 20040910	50㎡ 900㎡	過疎基幹 農道整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
牧野遺跡	散布地	縄文時代早期	集石 配石	土器 （貝殻文系土器） 石鏃 石匙 磨製石斧 磨石 敲石 台石類	

例　言

1．本書は過疎基幹農道整備事業（平山２期地区）に伴う牧野遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．本調査は，鹿児島県農政部（熊毛支庁土地改良課）の委託を受け，西之表市教育委員会が実施した。

3．本書に用いたレベル数値は，鹿児島県農政部（熊毛支庁土地改良課）が作成した地形図に基づく海抜高である。

4．本書の遺物番号は全て通し番号で本文及び挿図・図版番号と一致する。

5．発掘調査における測量・実測・写真撮影は沖田が行い，荒井美佳子・村松真由子・桑原とも子が測量，実測の補助を行った。

6．本書の執筆と編集は沖田が行い，遺物の実測・トレース・図面整理は沖田，荒井美佳子・中村桂子・内田順子・末満直美・原里菜が行った。なお，石器類の一部の実測・トレースを（株）九州文化財研究所に委託した。

7．写真図版の遺物撮影は（株）トライ社が行った。

8．炭化物の科学分析はパリノ・サーヴェイ（株）が行った。

9．発掘調査及び整理作業に関して，鹿児島県教育庁文化財課・鹿児島県立埋蔵文化財センターの指導・協力を得た。

10．出土遺物は西之表市教育委員会で保管し，展示・活用する。

目　次

序文
報告書抄録
例言

第Ⅰ章　調査の経過……2
　第１節　調査に至る経緯……2
　第２節　調査の組織……2
　第３節　調査の経過……3
第Ⅱ章　遺跡の位置と環境……5
　第１節　遺跡の位置……5
　第２節　遺跡の環境……5
第Ⅲ章　発掘調査の概要……8
　第１節　調査の概要……8
　第２節　層位……8
　第３節　遺構……8
　第４節　遺物……20
　（1）　土器……20
　（2）　石器類……20
第Ⅳ章　科学分析……36
第Ⅴ章　調査のまとめ……38
　第１節　遺構……38
　第２節　遺物……38
　第３節　総括……39

挿図目次

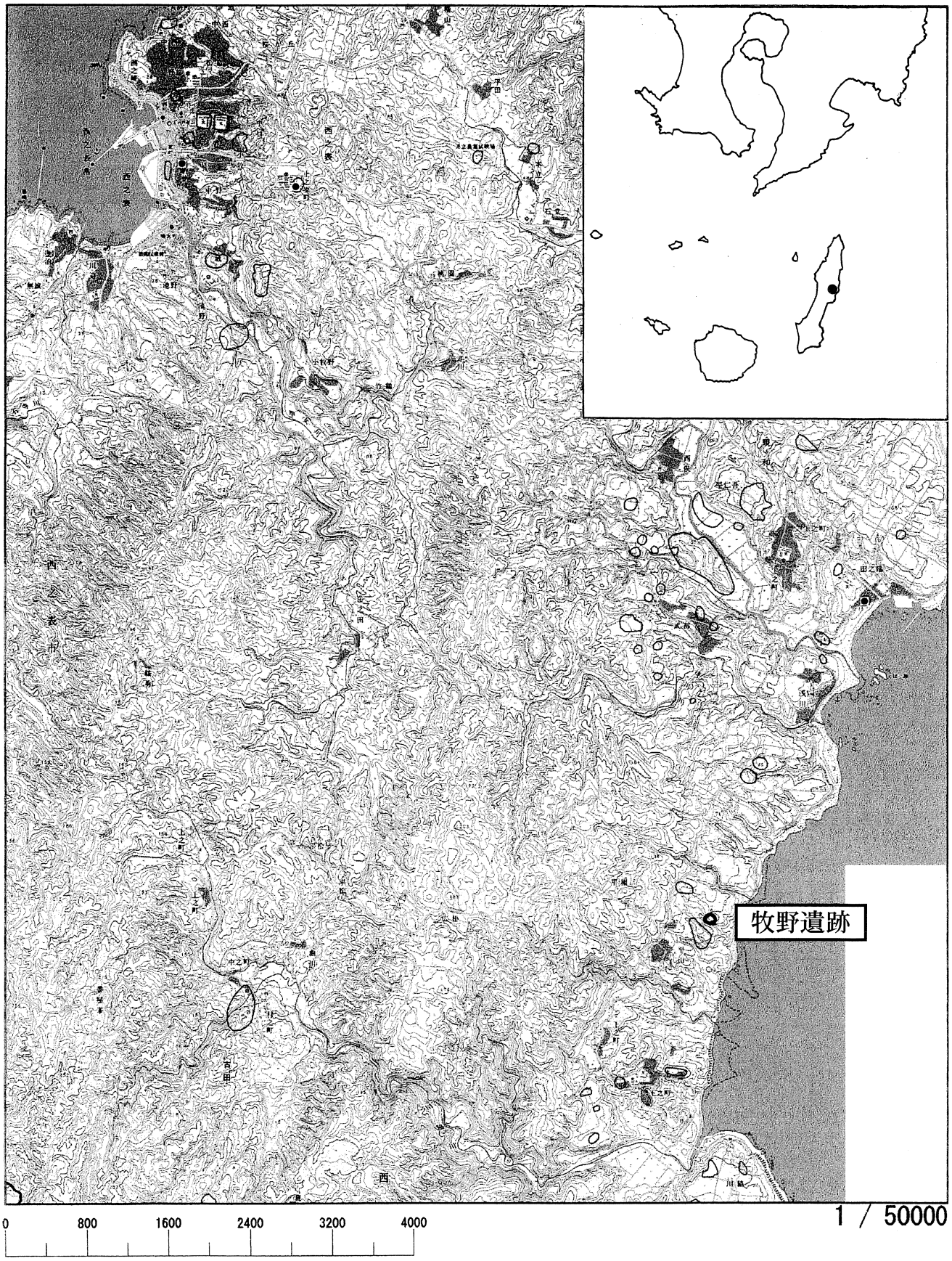
第１図　牧野遺跡の位置……1
第２図　牧野遺跡と周辺遺跡図……6
第３図　発掘調査地……9
第４図　東側土層断面図……10
第５図　西側土層断面図（1）……11
第６図　西側土層断面図（2）……12
第７図　遺構配置図……13
第８図　遺構（1）……15
第９図　遺構（2）……16
第10図　遺構（3）……18
第11図　遺構（4）……19
第12図　全遺物出土状況……21
第13図　土器出土状況……22
第14図　土器出土状況……23
第15図　出土土器（1）……25
第16図　出土土器（2）……26
第17図　出土土器（3）……27
第18図　出土土器（4）……28
第19図　出土石器（1）……29
第20図　出土石器（2）……30
第21図　出土石器（3）……31
第22図　出土石器（4）……32
第23図　出土石器（5）……33

表目次

第１表　牧野遺跡周辺遺跡地名表 ……７
第２表　土器観察表 ……34
第３表　石器観察表（１）……34
第４表　石器観察表（２）……35

写真図版

図版１　調査状況（１）……40
図版２　調査状況（２）……41
図版３　調査状況（３）・土層断面 ……42
図版４　調査状況（４）・発掘作業員の皆さん 43
図版５　集石 ……44
図版６　配石 ……45
図版７　遺物出土状況（１）……46
図版８　遺物出土状況（２）……47
図版９　出土遺物（１）……48
図版10　出土遺物（２）……49
図版11　出土遺物（３）……50
図版12　出土遺物（４）……51
図版13　出土遺物（５）……52



第１図　牧野遺跡の位置

第Ⅰ章　調査の経過

第１節　調査に至る経緯

鹿児島県農政部（熊毛支庁土地改良課）は，西之表市内において過疎基幹農道整備事業（平山２期地区）を計画し，事業区内の埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化財課（以下県文化財課）に照会した。これを受けて県文化財課が埋蔵文化財分布調査を実施した。その結果，事業区内に牧野遺跡が所在することが判明した。分布調査の結果をもとに熊毛支庁土地改良課・県文化財課・西之表市教育委員会は遺跡の取り扱いについて協議を行い，埋蔵文化財と開発事業の調整を図るため，埋蔵文化財確認調査を実施することとなった。牧野遺跡の確認調査は，平成15年10月３日から11月６日まで，西之表市教育委員会が調査主体となり実施し，工事対象地内に遺物包含層が残存していることが判明した。確認調査後，熊毛支庁土地改良課・県文化財課・西之表市教育委員会が再度遺跡の取り扱いについて協議を行った結果，遺物包含層を現状保存することは不可能なため，緊急発掘調査を実施し，遺跡の記録保存を行うこととなった。

牧野遺跡の緊急発掘調査は西之表市教育委員会が調査主体となり平成16年７月５日から９月10日まで行った。整理・報告書作成作業は平成17年度に行った。

第２節　調査の組織

（緊急発掘調査）

事業主体者	鹿児島県農政部　熊毛支庁土地改良課
発掘調査主体者	西之表市教育委員会
発掘調査責任者	西之表市教育委員会　教　育　長　有島　正之
発掘調査企画担当	西之表市教育委員会　社会教育課　課　　長　阿世知猛雄
〃	〃　〃　課長補佐　奥村　学
発掘調査担当者	西之表市教育委員会　社会教育課　主　　事　沖田純一郎
発掘調査作業員	長濱トミ子・上妻レイ子・榎本オリエ・竹之内綾子・田上亥年・金澤光治 鮫島ミワ子・長野フミエ・徳永ミツエ・川原明子・山口エチ子・牧瀬文子 牧瀬雄二・長野フミ子・桑原とも子・荒井美佳子・村松真由子・村井雄太 奥村一也

（整理・報告書作成）

事業主体者	鹿児島県農政部　熊毛支庁土地改良課
作成主体者	西之表市教育委員会
作成責任者	西之表市教育委員会　教　育　長　有島　正之
作成企画者	西之表市教育委員会　社会教育課　課　　長　河野　博康
	〃　〃　課長補佐　奥村　　学
作成庶務担当	西之表市教育委員会　社会教育課　主　　査　濱渡　友子
作成担当	西之表市教育委員会　社会教育課　主　　事　沖田純一郎
整理作業員	内田順子・中村桂子・末満直美・原　里菜・荒井美佳子

第３節　調査の経過

緊急発掘調査は平成16年７月５日から９月10日まで行った。確認調査の結果をもとに，工事対象地内において遺物包含層残存部分範囲のみ緊急発掘調査を行った。重機によりアカホヤ火山灰層までを除去後，人力により堀下げながら調査を進めていった。表土の下位にある盛り土が場所によっては数mに達するところもあり，表土・盛り土の除去，排土処理に時間を費やした。以下調査の経過については日誌抄をもってかえる。

7月５日	月	ベルトコンベア設置。東側より掘り下げ。土器片・礫・石斧出土する。重機，表土・盛り土除去・排土処理作業。阿世知社会教育課長・奥村課長補佐来跡。
６日	火	北側より東・西側を掘り下げ。集石検出作業，写真撮影。重機，表土・盛り土除去・排土処理作業。種子島開発総合センター尾形氏来跡。
７日	水	集石２基検出作業。写真撮影。実測開始。西側・南側掘り下げ。重機，表土・盛り土除去・排土処理作業。
８日	木	集石実測。東側掘り下げ，土器片・石斧出土。重機，表土・盛り土除去・排土処理作業。市農林水産課職員２名来跡。
９日	金	西側掘り下げ。平板・レベル遺物取り上げ。
12日	月	西側・東側掘り下げ。集石・配石検出作業。東側より磨製石鏃１点出土。
13日	火	集石・配石実測作業。東側掘り下げ。有島教育長・阿世知社会教育課長，熊毛支庁土地改良課津江氏来跡。
14日	水	平板・レベル遺物取り上げ。遺構配置図平板測量。南側掘り下げ。
15日	木	集石・配石実測作業。南側掘り下げ。土器片，石匙出土。
16日	金	集石実測作業。平板・レベル遺物取り上げ。南側掘り下げ。近畿機械産業職員ベルトコンベアメンテナンスのため来跡。
20日	火	集石実測作業。南側掘り下げ。
21日	水	集石実測作業。南側，東西掘り下げ。石鏃１点出土。熊毛支庁土地改良課津江氏来跡。
22日	木	南側，東西掘り下げ。遺物出土状況写真撮影。
23日	金	平板・レベル遺物取り上げ。西側土層清掃，土層断面図作成。
26日	月	西側土層断面図作成。配石検出作業。南側掘り下げ。
27日	火	配石検出作業。北側掘り下げ。磨製石鏃１点出土。阿世知社会教育課長・奥村補佐来跡。
８月４日	水	南側掘り下げ。平板・レベル遺物取り上げ。集石実測作業。熊毛支庁土地改良課津江氏来跡。
５日	木	西側土層断面図作成。南側掘り下げ。
６日	金	西・東側掘り下げ。平板・レベル遺物取り上げ。
９日	月	調査地草払い。西・東側掘り下げ。
16日	月	南側・東地区掘り下げ。集石検出作業。社会教育課村井氏・大山氏来跡。

8月17日	火	集石検出作業。北側から南側へ向かい順次掘り下げ実施。
18日	水	配石実測，配置図平板測量。西側掘り下げ。平板・レベル遺物取り上げ。
23日	月	集石清掃。写真撮影，実測作業。東側土層断面図作成。社会教育課村井氏来跡。
24日	火	集石検出作業。南側掘り下げ。
25日	水	集石検出作業・写真撮影・実測作業。南側掘り下げ。平板・レベル遺物取り上げ。
26日	木	南側掘り下げ。台風接近のため調査地周辺に土納を積む。
9月1日	水	台風後整理，調査地清掃。集石検出・実測作業。北側掘り下げ，平板・レベル遺物取り上げ。奥村社会教育課長補佐来跡。
2日	木	集石実測作業。北側掘り下げ，清掃。
3日	金	集石実測作業。北側掘り下げ，平板・レベル遺物取り上げ。
6日	月	北側掘り下げ，平板・レベル遺物取り上げ。奥村社会教育課長補佐来跡。
7日	火	北側掘り下げ。清掃。
8日	水	北側掘り下げ。集石実測作業。
9日	木	北側掘り下げ，平板・レベル遺物取り上げ。集石実測作業。
10日	金	平板・レベル遺物取り上げ。調査地内清掃。発掘道具後片付け，調査終了。奥村社会教育課長補佐来跡。

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

第１節 遺跡の位置

種子島は本土最南端の佐多岬から大隅海峡を隔てた，東南約40kmの海上にあり，南北52km，東西12kmの北北東から南南西に細長く伸びた，最高標高でも282.3mしかない低平な細長い島で，地形は丘陵性の山地，海岸段丘，河川付近の沖積低地からなり，西方に位置する屋久島とは対照的である。また，西海岸部には比較的砂丘が発達しているが，東海岸は断崖に富んでいる。行政区は北から西之表市・中種子町・南種子町と１市２町からなる。

牧野遺跡は西之表市の東南海岸部安城地区平山の標高約57mの海岸段丘上に位置し，遺跡の東側には太平洋を望むことができる。遺跡の周辺には川が流れており，海岸部に極めて近い位置に遺跡は形成されている。

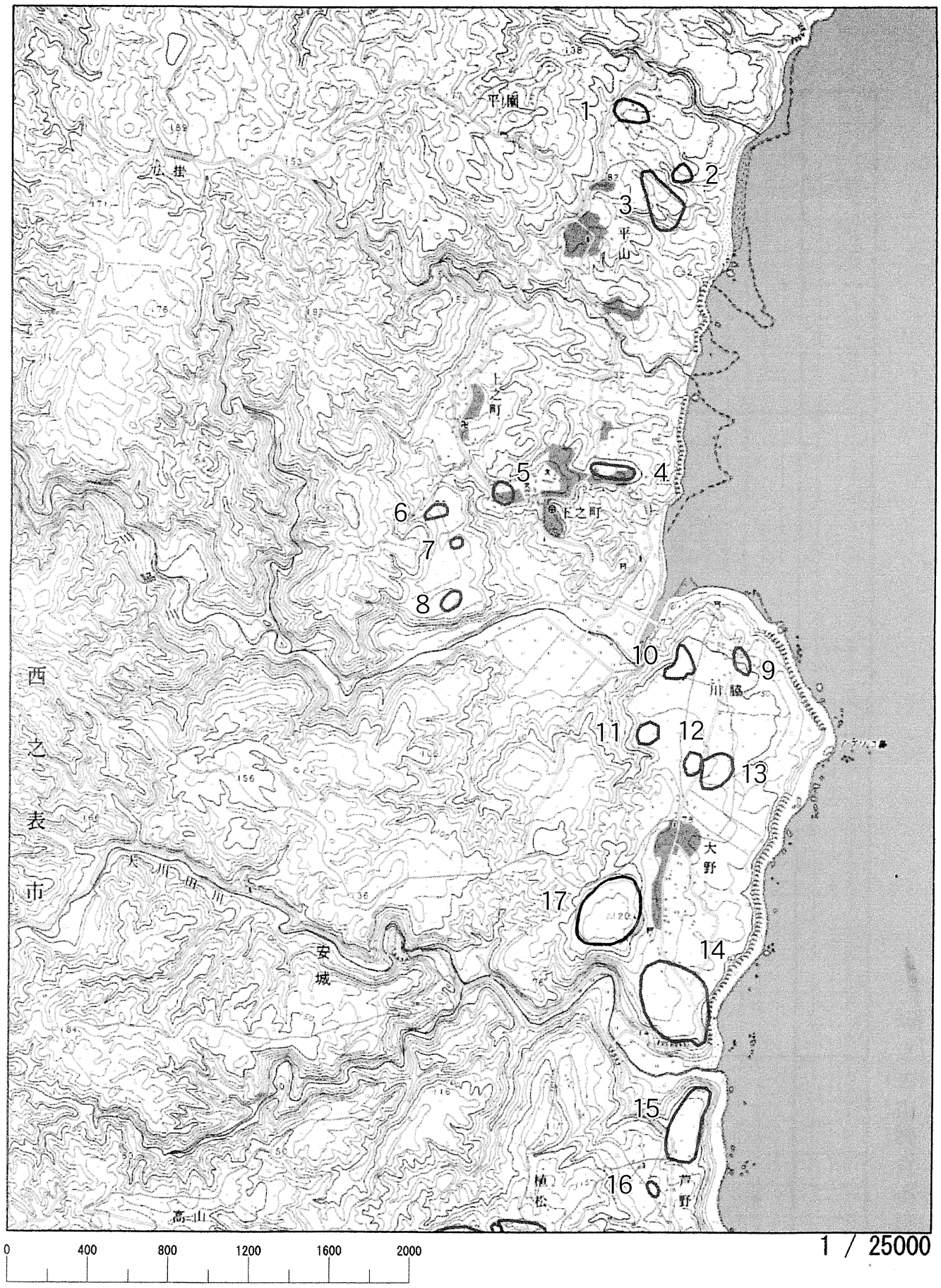
種子島の遺跡について述べると，約３万年前の旧石器時代の遺跡である横峯遺跡（南種子町）・立切遺跡（中種子町）や，細石核・細石刃が採集された湊遺跡・大中峯遺跡（西之表市）があり，奥ノ仁田遺跡（西之表市）の調査によって縄文時代草創期の遺跡が初めて確認され，その後鬼ケ野遺跡や三角山遺跡（中種子町）の調査で縄文時代草創期の住居址や多数の遺構，遺物が発見され注目を浴びている。その後の縄文時代早期・前期の遺跡も島内各地で確認されているが，中期の遺物の報告例は少ない。後期の遺跡は指宿式・市来式などが出土する遺跡が島内各地で確認されており，納曾式土器の標識遺跡である納曾遺跡（西之表市），特異な配石遺構が多数検出された藤平小田遺跡（南種子町）などがある。

弥生時代は下剥峯遺跡・田ノ脇遺跡・馬毛島椎ノ木遺跡（西之表市）や，多数の人骨と貝製品が出土した広田遺跡（南種子町），覆石墓・人骨が出土した鳥ノ峯遺跡（中種子町）　などがあり，中期頃の土器片が出土する遺跡も確認されているが，埋葬址が多いのが特徴的である。

古墳時代に属すると思われる遺跡は上能野貝塚（西之表市）などがある。種子島において，弥生時代以降の遺跡は縄文時代の遺跡に比べ極端に少ないため，未解明な点が多いのが現状である。

第２節 遺跡の環境

牧野遺跡が所在する西之表市の東南海岸部，とくに安城・立山地区は近年開発事業のため発掘調査が毎年実施され，良好な資料が出土している。特に，奥ノ仁田遺跡・鬼ヶ野遺跡は縄文時代草創期(約12,000年前)の遺跡であり，奥ノ仁田遺跡の出土品は県の文化財に指定された。平成13年に調査が行われた鬼ヶ野遺跡からは竪穴住居跡や多数の遺構が検出され，また石鏃が約400点出土し話題となった。今後も縄文時代草創期の遺跡は増加していくものと思われ，縄文時代の成り立ちを考える上で，重要な場所である。



第２図　牧野遺跡と周辺遺跡図

第１表　牧野遺跡周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	時代	備考
1	牧野B	西之表市安城平山	縄文時代草創期	平成10年農政分布調査
2	牧野	西之表市安城平山	縄文時代早期	平成16年発掘調査 本報告書
3	二俣野	西之表市安城平山	縄文時代早期	平成15年発掘調査
4	仮屋園	西之表市安城平山	縄文時代早期	平成10年農政分布調査
5	通利山	西之表市安城上之町	縄文時代	平成13年県道分布調査 平成15年試掘調査
6	鬼ヶ野A	西之表市安城上之町	縄文時代	平成12年確認調査
7	鬼ヶ野B	西之表市安城上之町	縄文時代	平成12年確認調査
8	鬼ヶ野	西之表市安城上之町	縄文時代草創期	平成13年発掘調査
9	三本松	西之表市安城川脇	縄文時代早期	平成17年発掘調査
10	日守C	西之表市安城大野	縄文時代早期	平成６年確認調査
11	日守B	西之表市安城大野	縄文時代早期	平成６年確認調査
12	日守	西之表市安城大野	縄文時代早期	平成7・8年発掘調査
13	長迫	西之表市安城大野	縄文時代早期	平成13年県道分布調査 平成13年試掘調査
14	東前平	西之表市安城大野	縄文時代早期	平成14・15年発掘調査
15	芦野	西之表市立山芦野	縄文時代早期	平成16年発掘調査
16	九郎三ェ門	西之表市立山芦野	縄文時代	平成３年農政分布調査
17	鍬ノ刃	西之表市安城大野	縄文時代早期	平成17年発掘調査

第Ⅲ章　調査の概要

第１節　調査の概要

緊急発掘調査は確認調査の結果をもとに，工事対象地内の遺物包含層残存部分のみ行った。調査は表土・アカホヤ火山灰土までを重機で除去した後，人力で掘り下げを行った。

出土遺物は平板・レベルで出土地点等を記録し，全ての遺構については検出したのち写真撮影，実測を行い記録保存を行った。調査面積は約900㎡である。

第２節　層　位

土層は場所によって一部の層が欠落している部分もあるが，基本的には下記のとおりである。

Ⅰ層	表土	
Ⅱ層	黒色土	
Ⅲ層	黄橙色火山灰層	アカホヤ火山灰層 （約6,400年前の鬼界カルデラ噴出物）
Ⅳ層	ベージュ色ローム土	遺物包含層（縄文時代早期） 一部下位に暗黄色で小指大のパミスが散在する。サツマ火山灰と思われる。
Ⅴ層	暗茶褐色粘質土	場所によっては黒色が強い場合もある。
Ⅵ層	明黄色火山灰層	ＡＴ火山灰層（姶良カルデラの噴出物で細粒）
Ⅶ層	ベージュ色粘質土層	（粘質が強く軟質である）

第３節　遺構

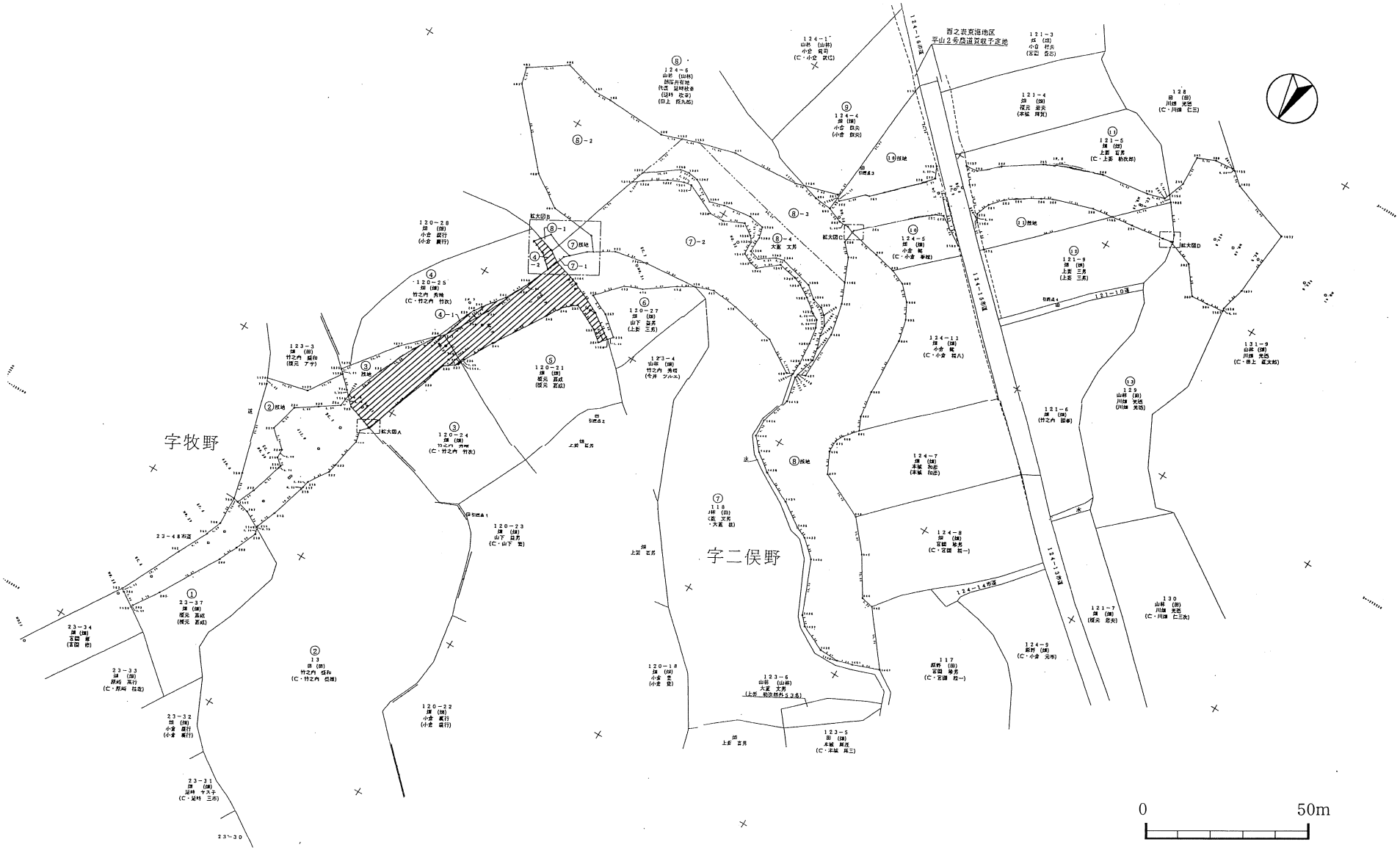
遺構は集石が７基，配石が８基検出された。検出面は全て第Ⅳ層で縄文時代早期のものである。以下各遺構の検出状況について述べる。

１号集石（第８図）

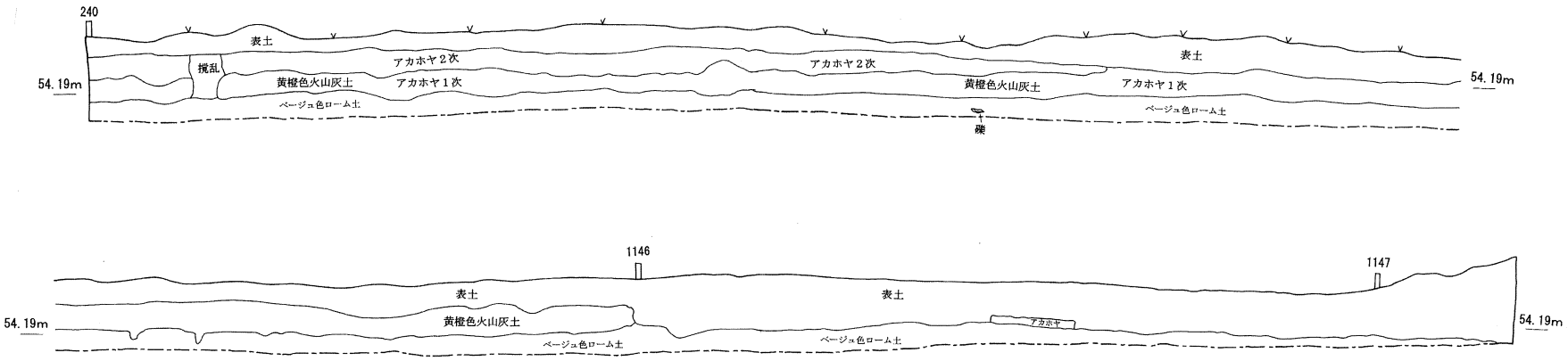
49cm×51cmの範囲内に拳大の大きさの13点の礫から構成されている。小ぶりの集石である。礫のほとんど炎熱を受け赤化しているものの，周辺及び内部からは炭化物は検出されなかった。また掘り込みも確認されなかった。礫は全て砂岩である。

２号集石（第８図）

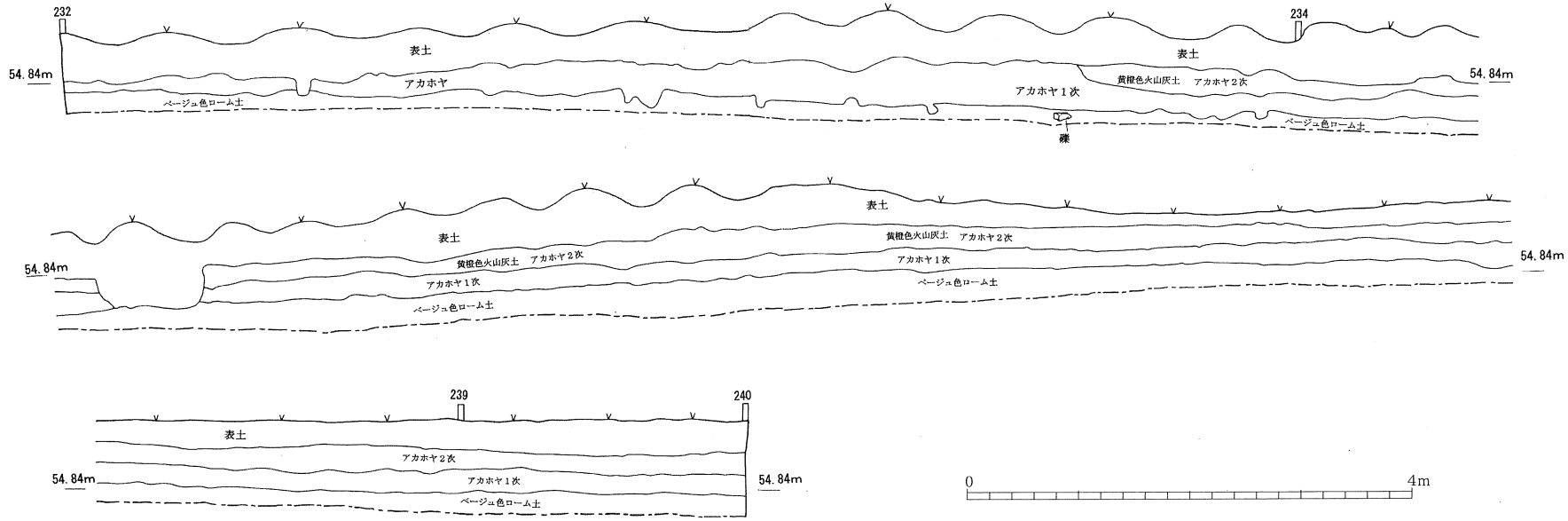
101cm×109cm範囲内に75点の礫から構成されている。掘り込みを有する。掘り込みの深さは検出面から約20cmほどである。礫は20cmを超える大きめのものが使用され，全て砂岩である。掘り込みの埋土は黒茶褐色で軟質であり，中心部は黒色が著しかった。周辺及び掘り込み内から炭化物が検出された。礫はすべて炎熱を受け赤化し，熱により破砕した礫も数点みられた。



第３図　発掘調査地

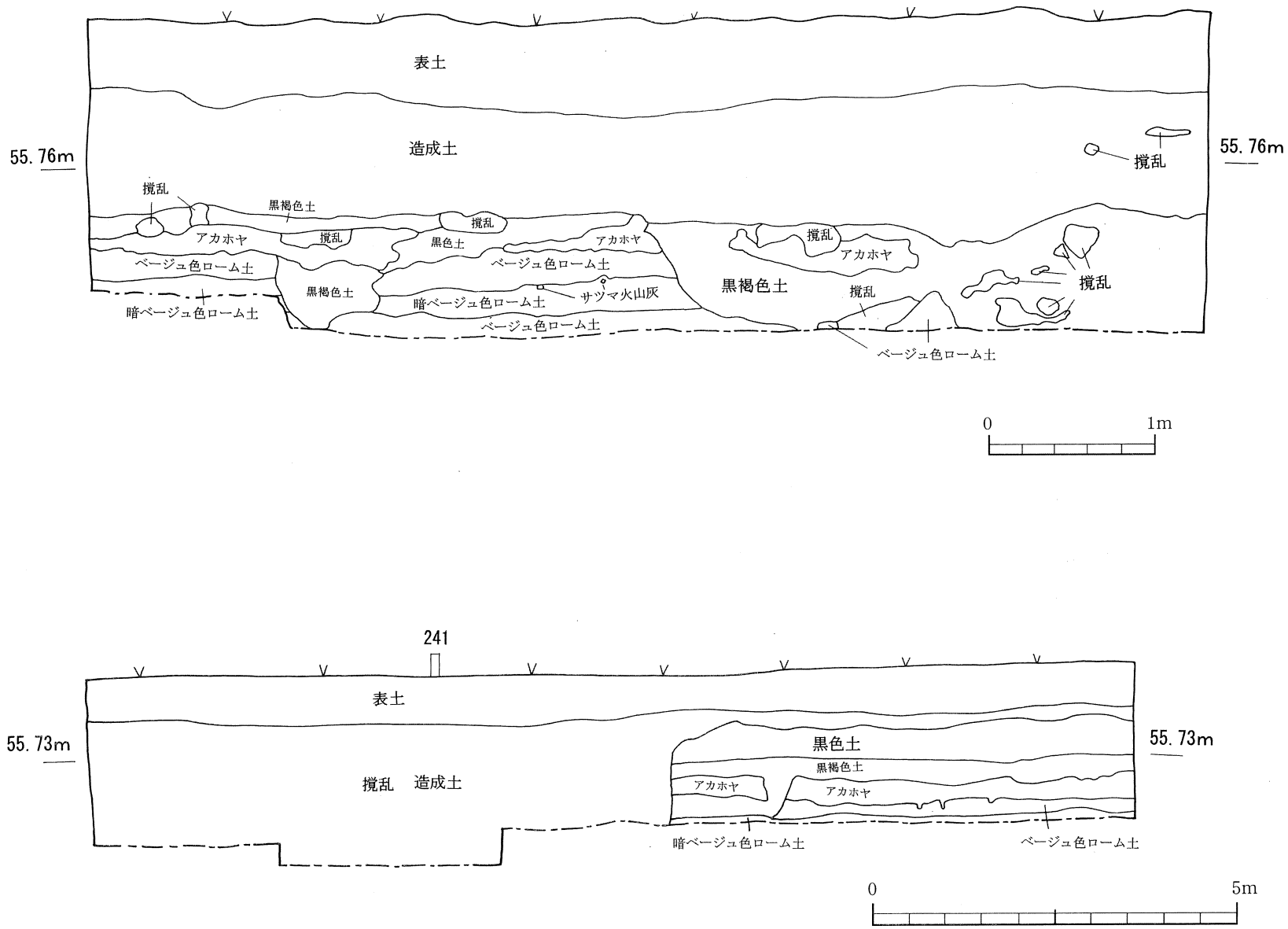


東側土層断面図（１）

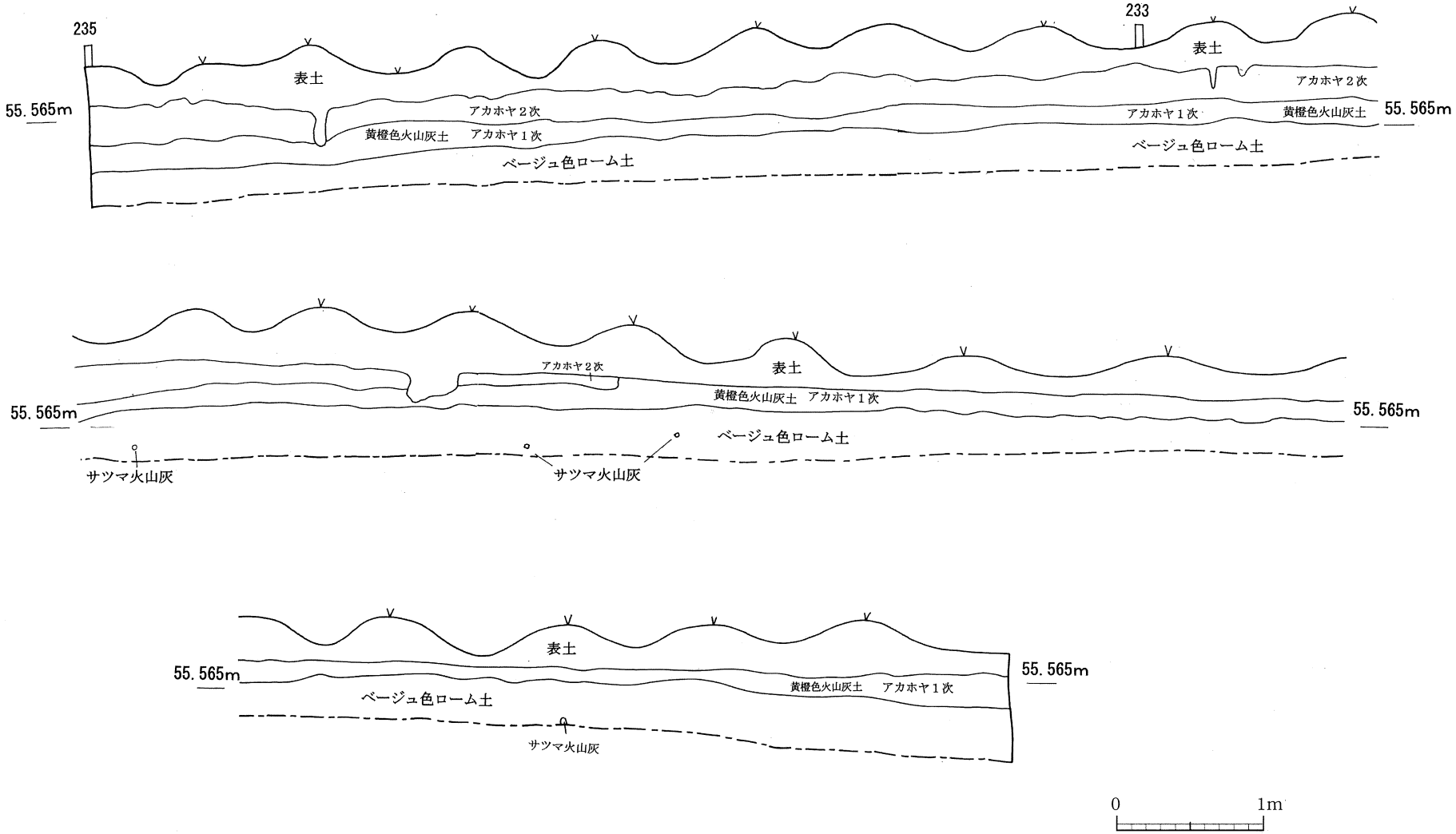


東側土層断面図（２）

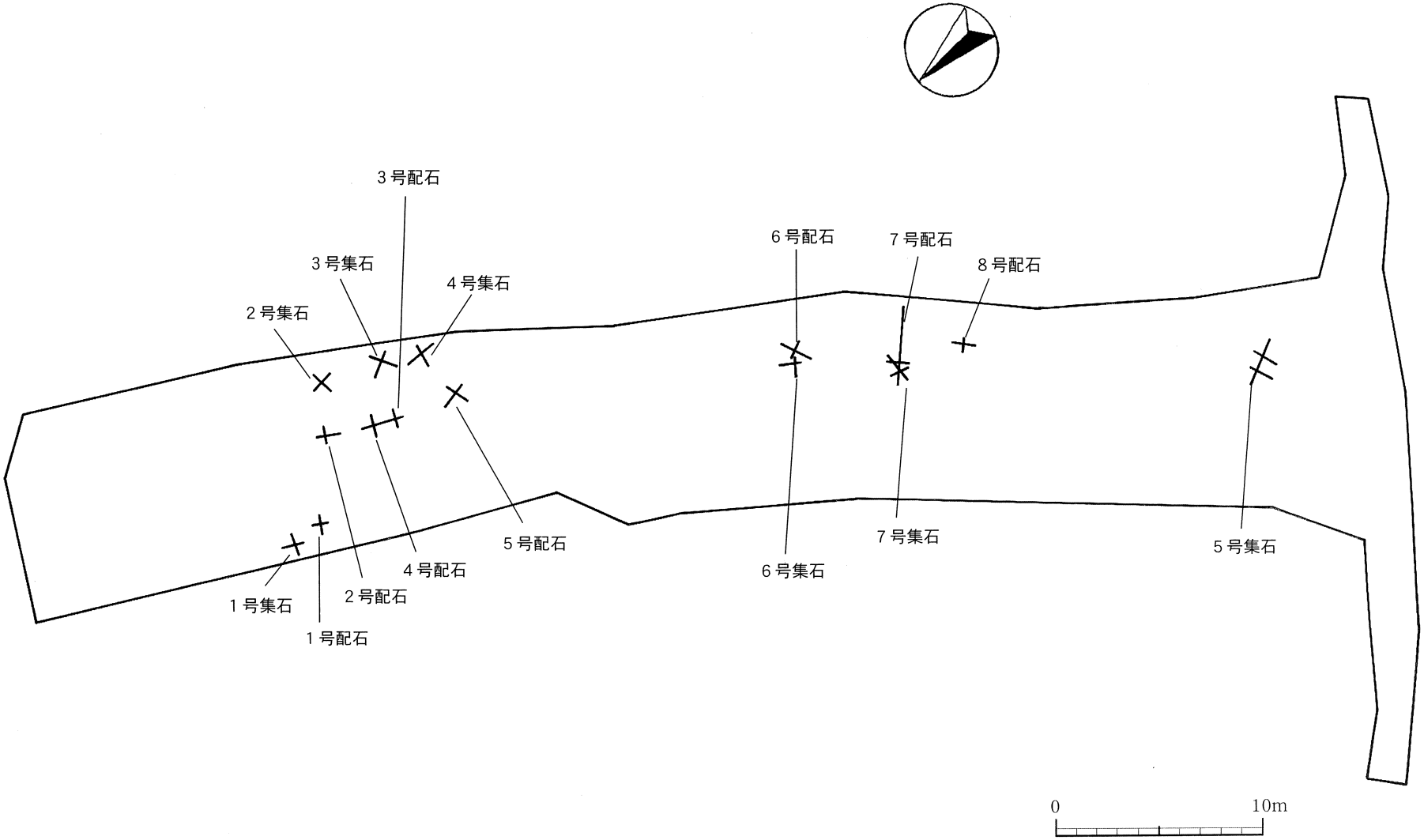
第４図　東側土層断面図



第５図　西側土層断面図（１）



第６図　西側土層断面図（２）


3号配石
3号集石
4号集石
2号集石
6号配石
7号配石
8号配石
5号配石
4号配石
2号配石
1号集石
1号配石
6号集石
7号集石
5号集石
0
10m

第7図　遺構配置図

3号集石（第8図）

152cm×128cmの範囲内に19点の砂岩礫から構成されている。礫は10cmから20cmほどの大きさで，すべて砂岩である。検出状況は礫が散在した状態であった。全ての礫が炎熱を受け赤化し，熱破砕も見受けられた。内部及び周辺からは炭化物は検出されず，また掘り込みも確認されなかった。

4号集石（第8図）

172cm×177cmの範囲内に31点の砂岩礫から構成されている。礫は拳大から20cmを超えるものが使用され，全て砂岩である。半数の礫が炎熱を受け赤化し，熱破砕が見受けられた。周辺からは炭化物は検出されず，掘り込みも確認されなかった。

5号集石（第9図）

204cm×143cmの範囲内に60点の砂岩礫から構成されている。礫は数cmから50cmを超える大きさのものが使用されている。全ての礫が炎熱を受け赤化し，熱破砕がみられ，特に中央部の礫の赤化が著しかった。礫は赤化しているが，周辺からは炭化物は検出されず，掘り込みも確認されなかった。

6号集石（第9図）

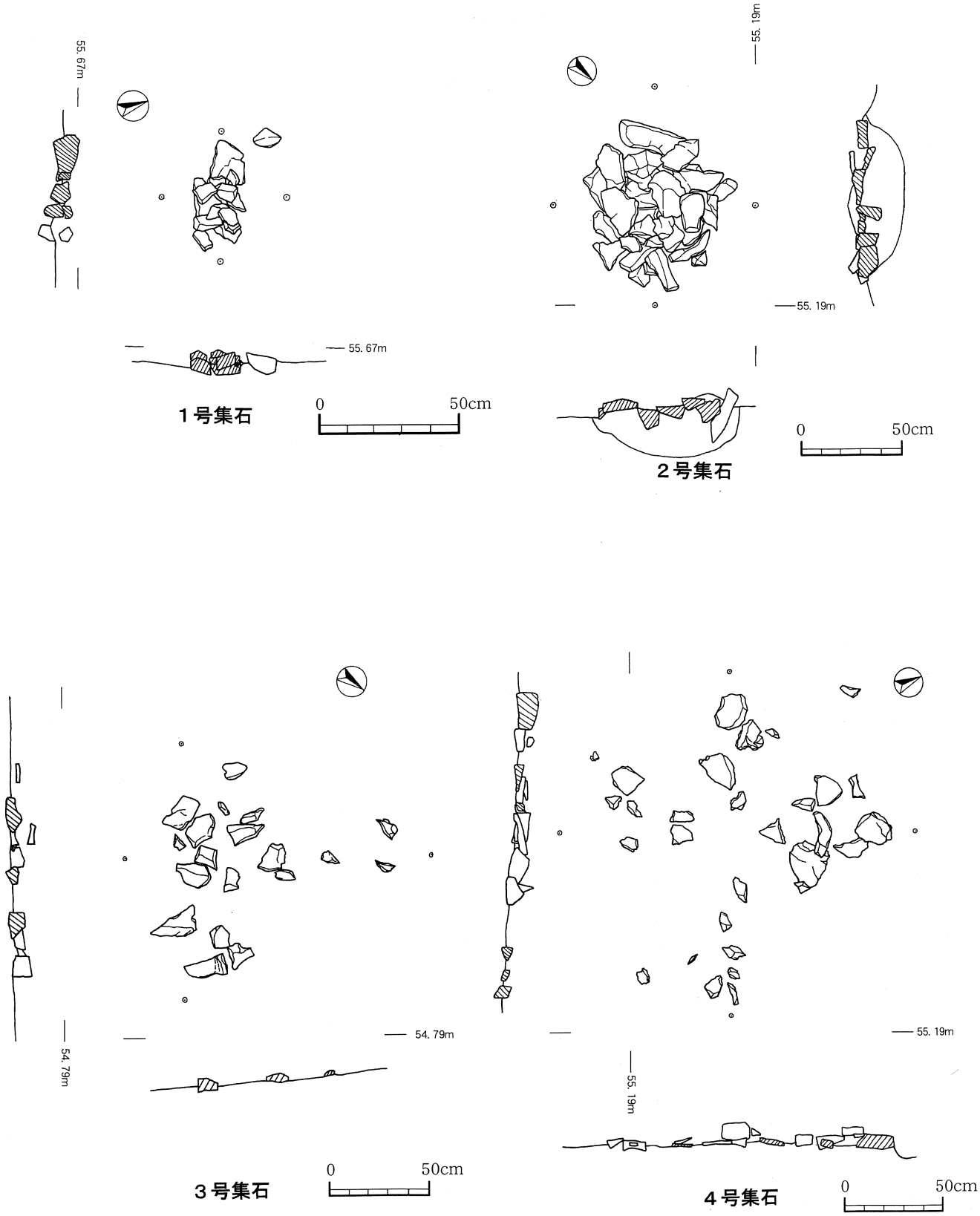
101cm×100cmの範囲内に18点の礫から構成されている。礫は手のひらから20cmを超えるサイズの大きめのものが使用され，全て砂岩である。礫の一部は炎熱を受け赤化している。掘り込み面は確認されず，炭化物も検出されなかった。全体的にばらけた感じのする集石である。

7号集石（第9図）

48cm×71cmの範囲内に拳大の礫4点から構成されている。礫は全て砂岩である。礫の点数が少なく，集石とするか判断に迷ったが，まとまっている3点の礫が炎熱を受け赤化しているため集石とした。掘り込み面は確認されず，炭化物は検出されなかった。

1号配石（第10図）

64cm×60cmの範囲内に5点の礫から構成されている。礫は拳大から20cmほどの大きさであり，全て砂岩である。礫の一部はわずかながら炎熱を受けたための赤化が見られる。礫がそれほど密集していなかったため，配石としたが，本来は集石であったとも考えられる。掘り込みはなく，炭化物は検出されなかった。


55. 67m
55. 67m
1号集石
0
50cm
55. 19m
55. 19m
2号集石
0
50cm
54. 79m
54. 79m
3号集石
0
50cm
55. 19m
55. 19m
4号集石
0
50cm

第８図　遺構（１）

54.655m
54.655m
5号集石
0
50cm
54.52m
54.52m
6号集石
0
50cm
54.32m
54.32m
7号集石
0
50cm

第９図　遺構（２）

２号配石（第10図）

103cm×92cmの範囲内に４点の礫から構成されている。礫は手のひらから20cmを超える大きさで，全て砂岩である。２点の礫はわずかながら炎熱を受け赤化が見られた。１号配石と同じく集石とも思われたが，礫の点数から配石とした。掘り込み面は確認されなかったが，周辺からは炭化物が検出された。

３号配石（第10図）

50cm×55cmの範囲内に５点の礫から構成されている。礫は全て砂岩で，大きさは10cmから20cmを超えるやや大きめのものである。３点の礫が炎熱を受け赤化し，熱破砕も見受けられた。この配石も検出状況から本来は集石であった可能性が十分考えられるが，礫の点数から配石とした。掘り込み，炭化物は確認されなかった。

４号配石（第10図）

60cm×95cmの範囲内に５点の礫から構成されている。礫の大きさは拳大から20cmを超えるもので，全て砂岩である。中央部の礫は炎熱を受けたためか，若干赤化している。掘り込みは無く，炭化物も検出されなかった。

５号配石（第11図）

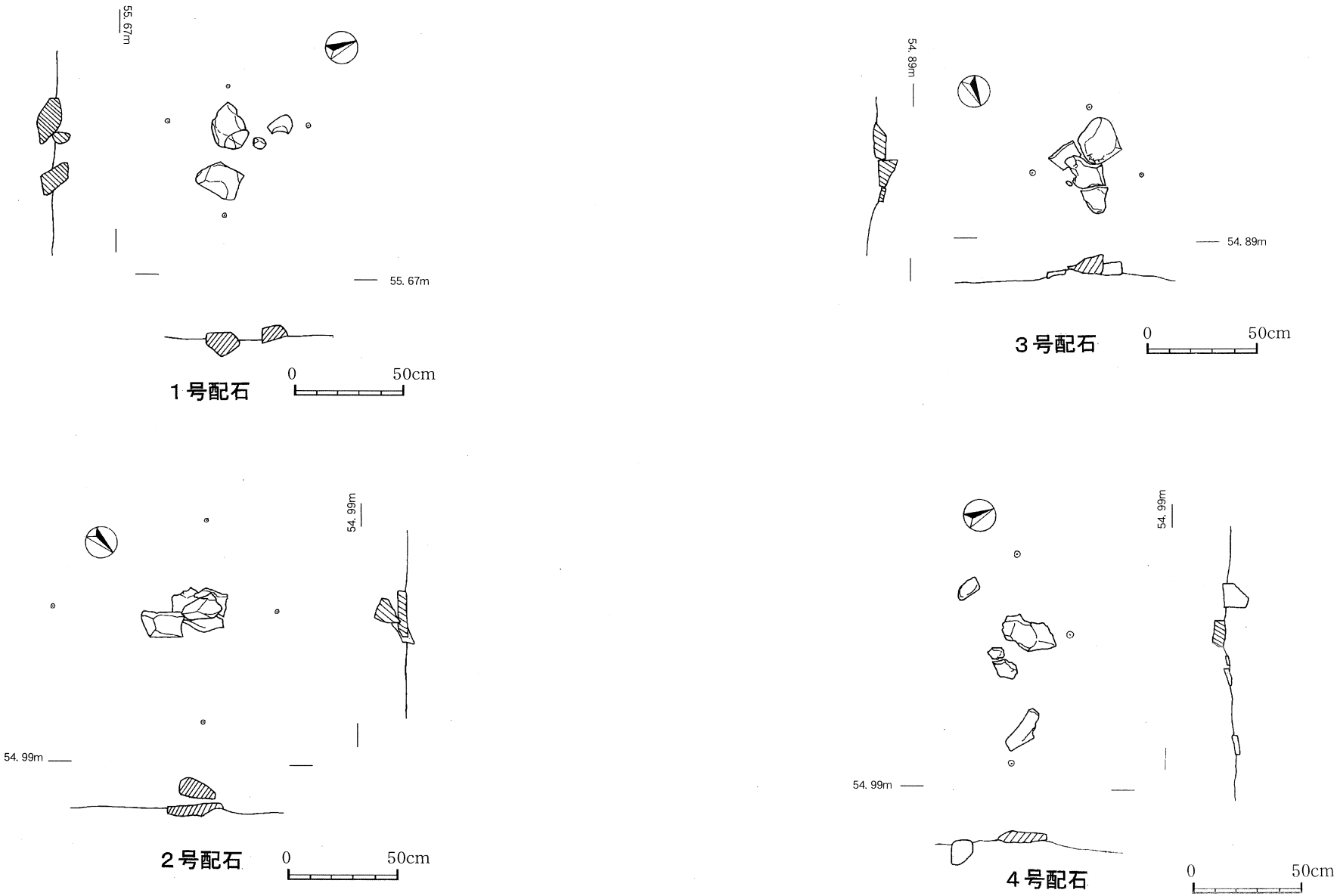
161cm×95cmの範囲内に１９点の礫から構成されている。礫の大きさは拳大から15cmほどで，全て砂岩である。東側のやや密集している礫は炎熱を受け赤化し，熱破砕を受けている。散在した状態での検出であったため，配石としたが本来は集石であった可能性も考えられる。掘り込み面は確認できず，また炭化物も検出されなかった。

６号配石（第11図）

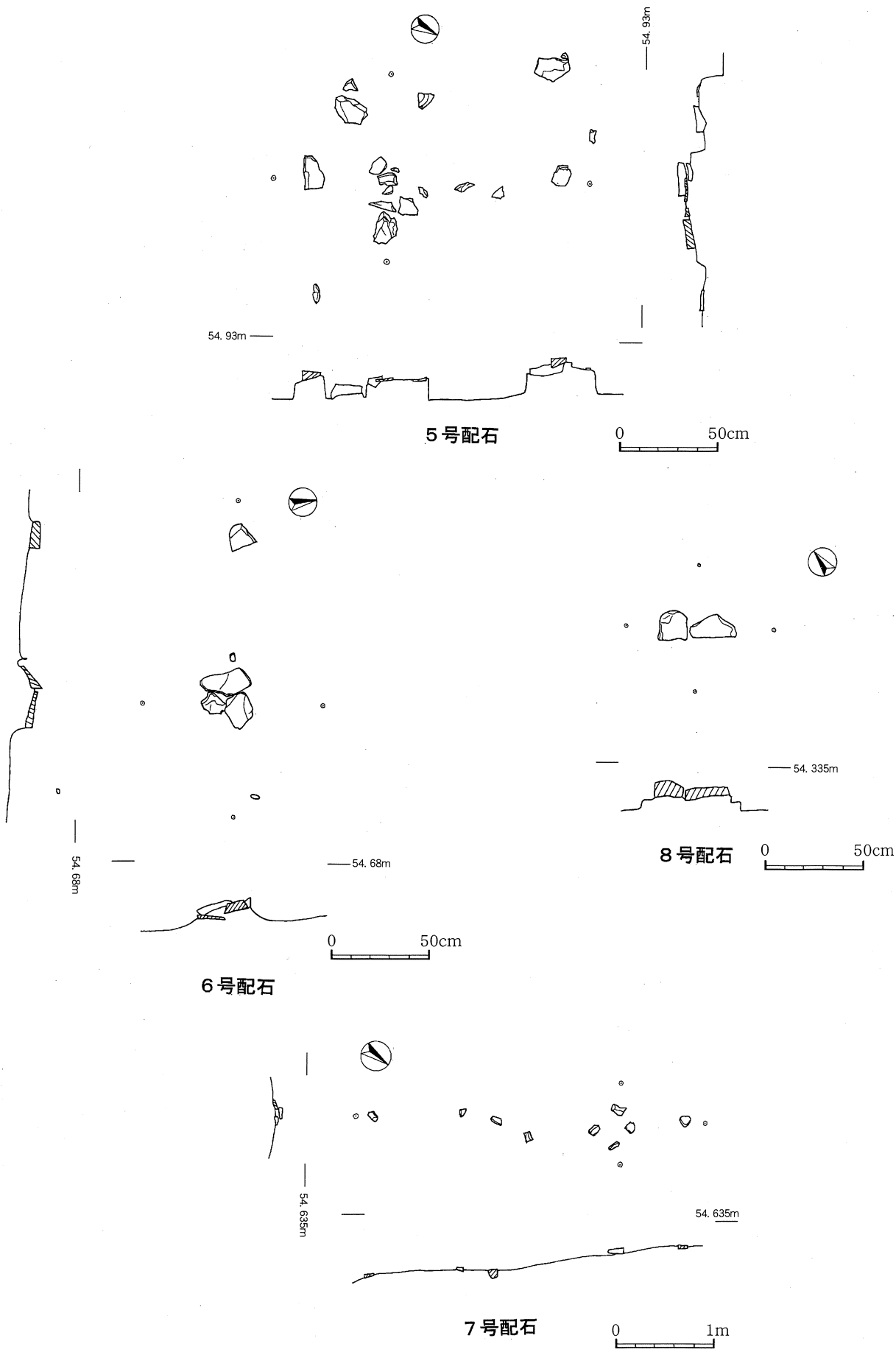
92cm×160cmの範囲内に６点の礫から構成されている。密集している３点の礫は10cmから20cmを超える大きさのものである。またこのうち，２点の礫は炎熱を受けたため赤化している。礫は全て砂岩で，掘り込みは確認されず，炭化物も検出されなかった。

７号配石（第11図）

344cm×82cmの広い範囲内に９点の礫から構成されている。礫の大きさは10cm程度で，全て砂岩である。かなり，散在した状態での検出であったが，礫がほぼ一直線状に配置していると考えは配石とした。全ての礫に炎熱を受けた痕跡は見当たらなかった。周辺にピットや土坑は検出されず，掘り込み，炭化物ともに確認されなかった。


55. 67m
55. 67m
1号配石
0
50cm
54. 89m
54. 89m
3号配石
0
50cm
54. 99m
54. 99m
2号配石
0
50cm
54. 99m
54. 99m
4号配石
0
50cm

第10図　遺構（3）


54. 93m
54. 93m
5号配石
0
50cm
54. 335m
8号配石
0
50cm
54. 68m
54. 68m
6号配石
0
50cm
54. 635m
54. 635m
7号配石
0
1m

第11図　遺構（4）

８号配石（第11図）

75cm×64cmの範囲内に２点の礫から構成されている。礫の大きさは約30cmと40cmで，砂岩である。炎熱を受けた痕跡は見受けられなかった。２点だけの検出のため配石とするかどうか判断に迷ったが，本遺跡ではこのように大きめの礫が２点並んでの出土がなかったため配石としたが，本来は台石・石皿として使用する目的で配置したが，その後廃棄したものとも考えられる。２点の礫には使用痕などは見当たらなかった。

第４節　遺物

遺物は土器片・石器類が出土した。出土した層は全てⅣ層である。時期区分では縄文時代早期に位置づけられるものである。取上げた遺物はパンケース12箱分であった。

１．土　器（第15図～第18図　１～13）

土器片は約100点出土したが，小片や磨耗が激しいものが大部分を占めたため，図化できたのは13点に留まった。文様は無文の土器や二枚貝の腹縁部で刺突を施しているもの，貝殻条痕文を施したものなどである。

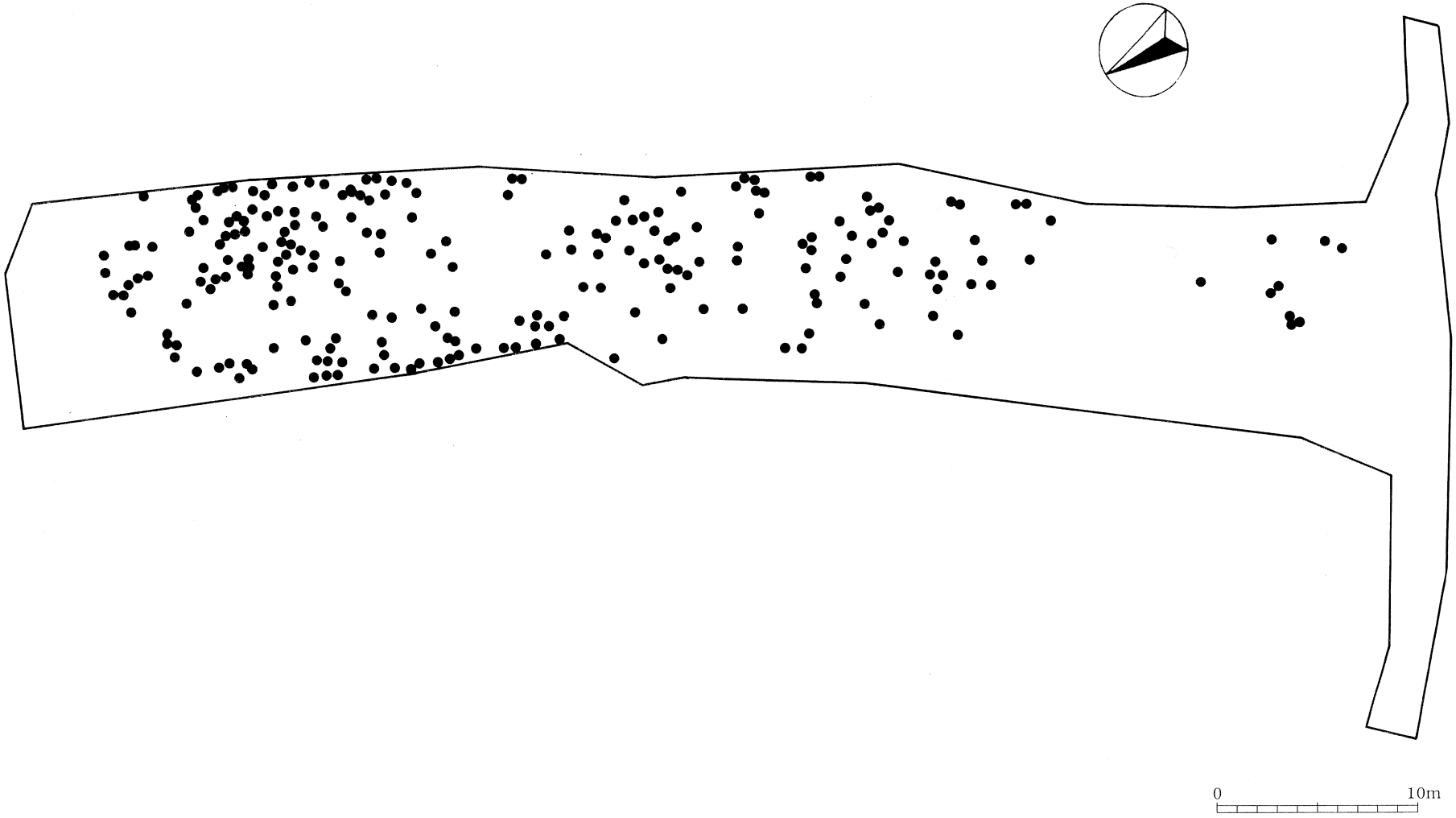
１・２は無文の口縁部である。１は数点が接合したもので直径約20cmで器形は胴部の上半は立ち上がり，下半は若干すぼまっていく円筒形の器形であると思われる。２は補修孔が見受けられる。１・２は胎土から同一個体と思われる。３は胴部で器壁が厚く，２条の貝殻沈線を施し，全体に貝殻条痕文が見られる。内面・外面ともにナデ調整が見られるが粗く仕上がっている。４は口縁がわずかながら稜を有すると思われる。文様は明確ではないが内外面に条痕文を施していると思われる。５は口縁部で波状口縁を呈するものである。外面に貝殻もしくは竹管状のものの刺突が見られる。内面は条痕文で整形されているが粗く仕上がっている。６は無文の口縁部である。胎土は１，２の土器に類似しており接合はできなかったが，同一個体の可能性もある。７は横位の貝殻刺突文がみられる。

８・９は器形がバケツ上になり，口縁部が若干内湾するものである。口唇部は平坦となり，文様は施していない。全体の施文は貝殻刺突文を鋸歯状に施すと思われ，口縁中位部分に横長の瘤状突起が見られる。この瘤状突起を境に上位は貝殻刺突文を縦位に，下位は貝殻刺突文を鋸歯状に施すと思われる。器内外の整形は丁寧なヘラ磨き調整が見られる。

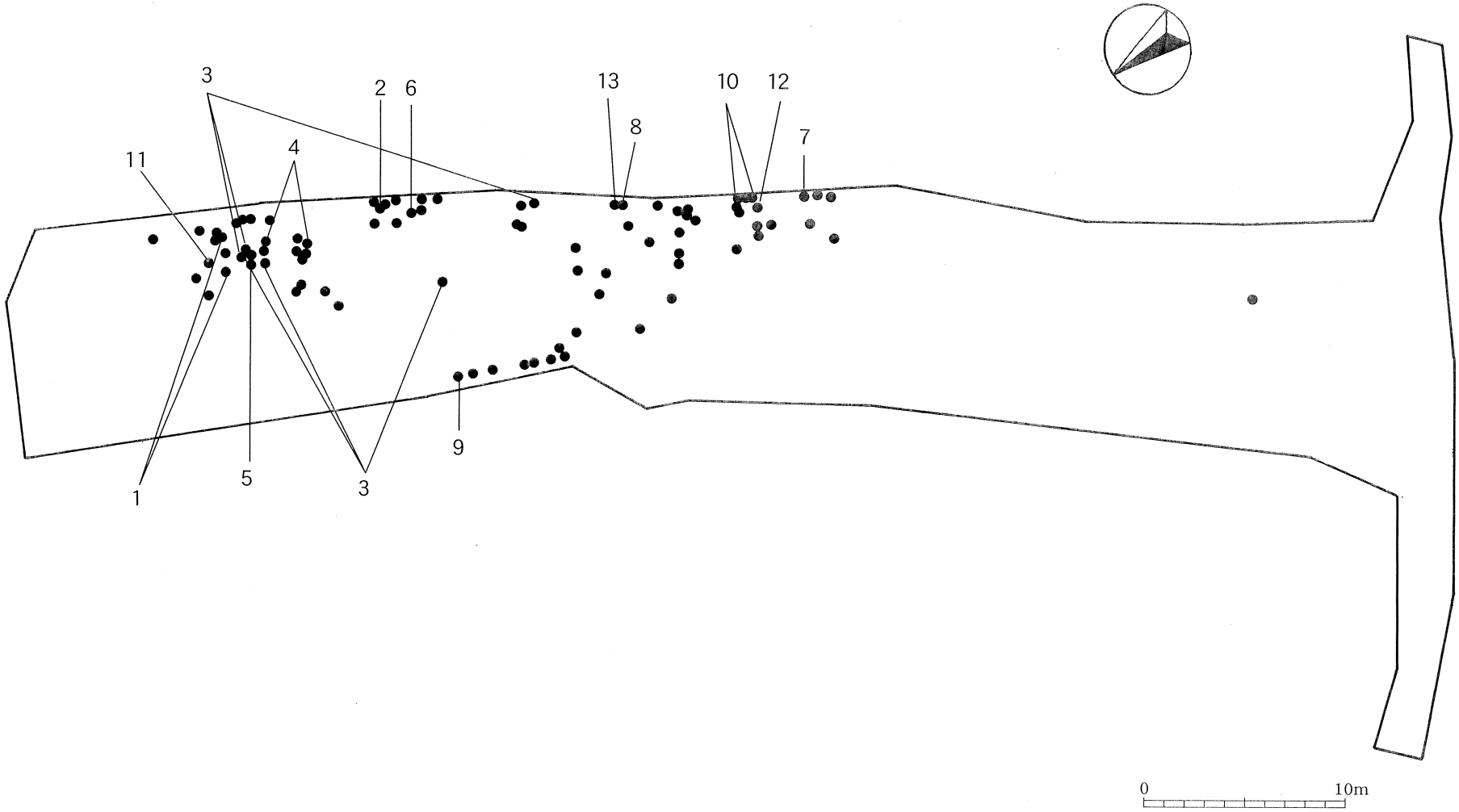
10，11，12は底部でいずれも平底で平坦になるものと思われる。10・11にはわずかながら刺突文が見られる。焼成・胎土から８・９の土器のタイプの底部であると思われる。13は胴部で３条の沈線文が見られる。

２．石器類（第19図～第23図　14～42）

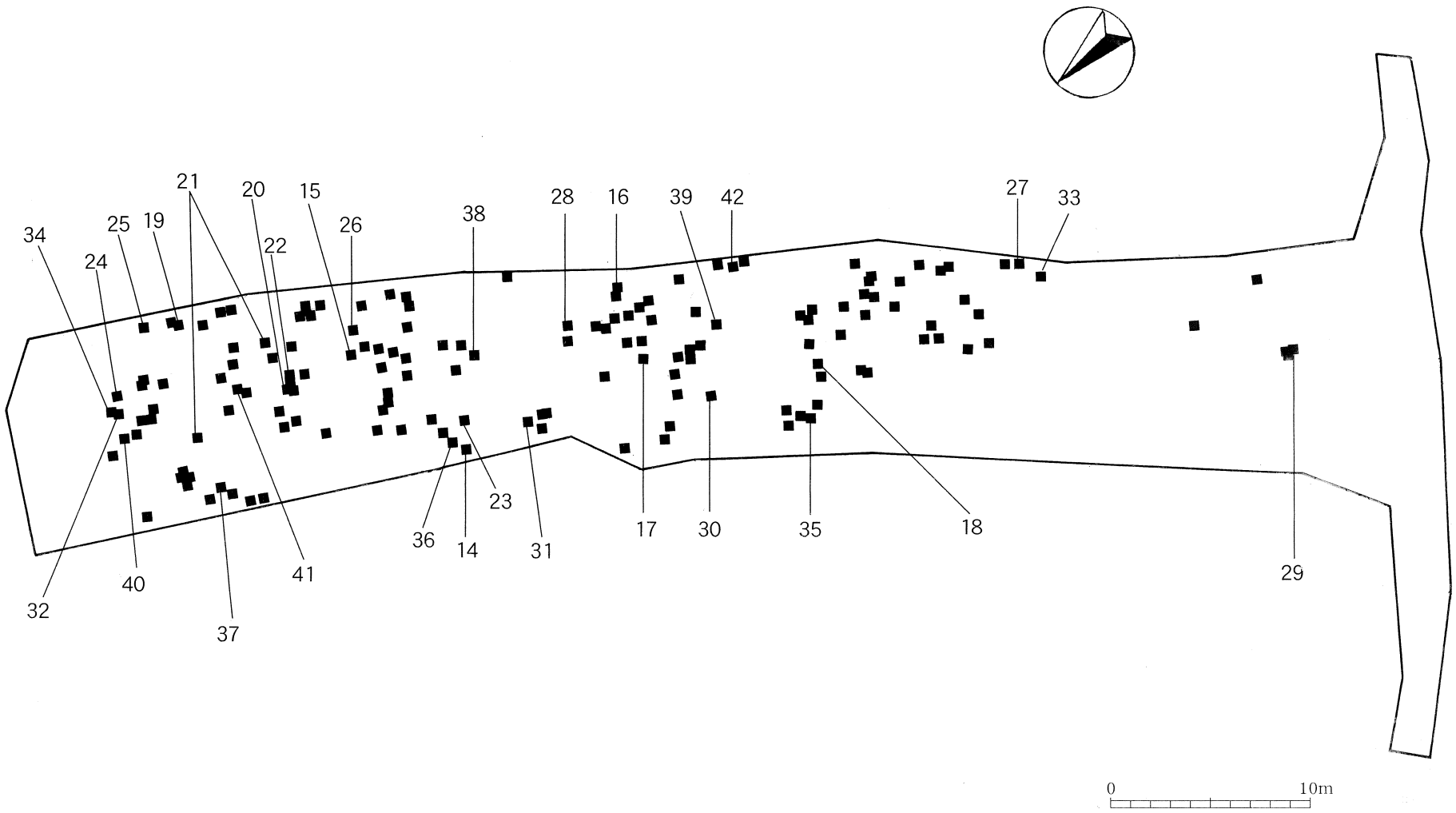
石器類は石鏃，石匙，石斧，磨石・敲石類，台石類等が出土した。



第12図　全遺物出土状況



第13図　土器出土状況

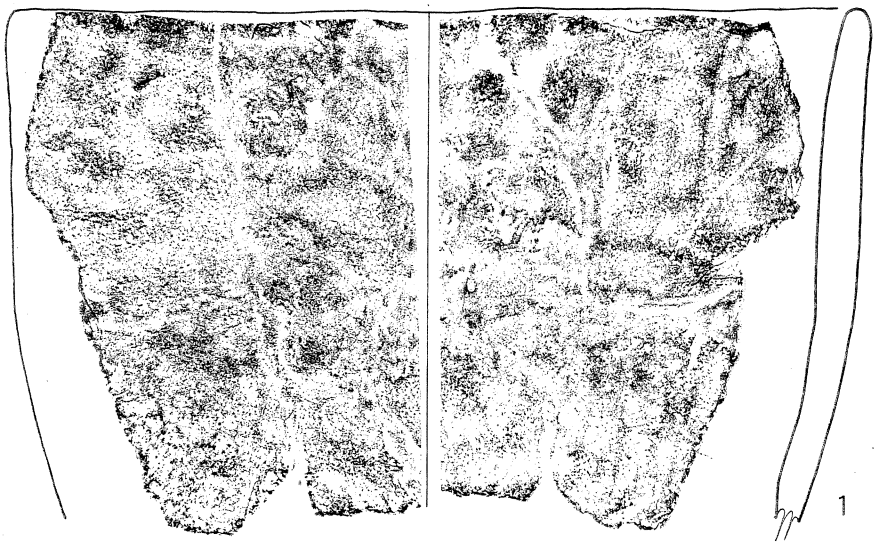

34
24
25
19
21
20
22
15
26
38
28
16
39
42
27
33
32
40
37
41
36
14
23
31
17
30
35
18
29
0
10m

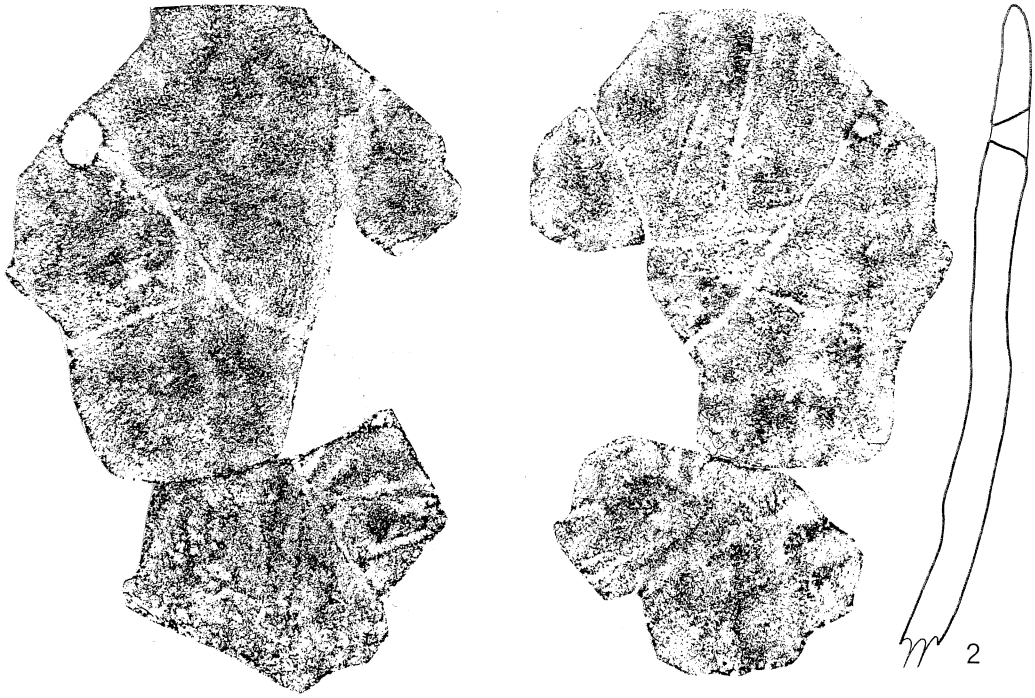
第14図　石器出土状況

14から17は石鏃である。うち14・15は磨製で全面を丁寧に磨き上げている。16・17は打製である。磨製石鏃の基部は真っ直ぐであるのに対して，打製石鏃の基部は抉りが入る特徴が見られる。14～16の石材は頁岩である。17はチャートである。18は石匙である。石材はホルンフェルスで，押圧剥離により刃部は細かい調整が丁寧に施されている。本市において，この時期の石匙が発掘調査で出土した例は極めて少ない。19から21は石斧である。19は磨製で表面を磨きあげている。石材はホルンフェルスである。20は磨製石斧の刃部で打撃により破損したものと思われる。石材はホルンフェルスである。21は確認調査時に出土した磨製石斧である。刃部は打撃によって破損・剥落がみられる。石材は頁岩である。22から40は磨石・敲石類である。あみかけは，平滑面があるところを表している。出土遺物の半数以上を磨石・敲石類が占め石材は全て砂岩である。22～27は磨る＋敲くの両方に使われたもので，円形のもの・楕円形のもの・不定形のものがある。22は側面にも敲打痕がみられる。28～40は磨石である。円形・楕円形・不定形な形のものがある。38は砥石として使用された可能性もある。41～42は台石である。41・42ともにわずかながら平滑面が見受けられる。全体的に使用痕，調整痕のない自然礫が多数出土したのが，特徴的である。

主な石材となる砂岩は遺跡周辺から持ち込まれたもので，容易に採取できたであろう。出土した石斧は木材の伐採・加工を行ったものと思われる。

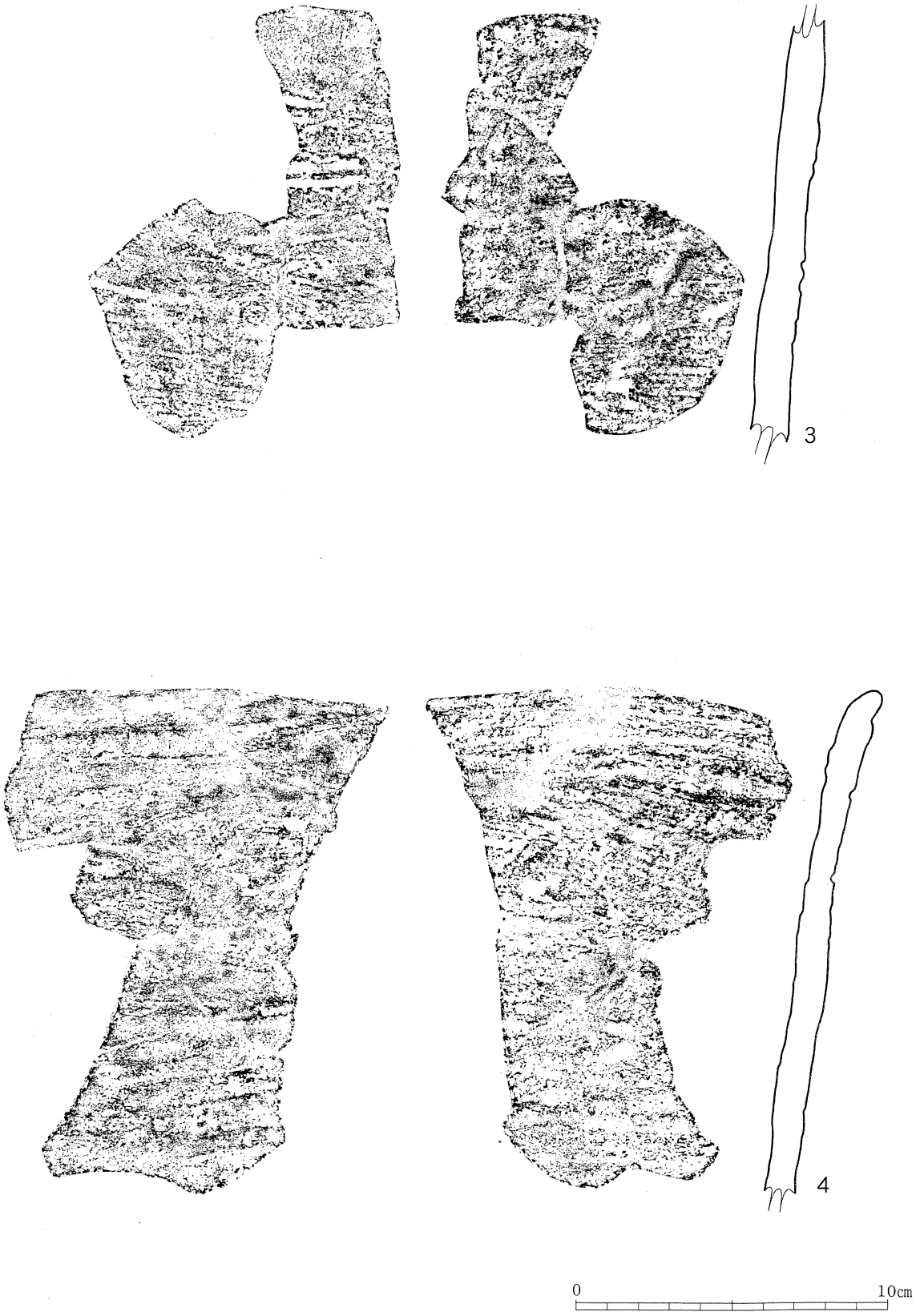
石鏃や石匙から，中小動物の狩猟を行っていたことが伺われる。また磨石・敲石類の出土が多いことから，植物性食料の依存度が高かった点が考えられる。



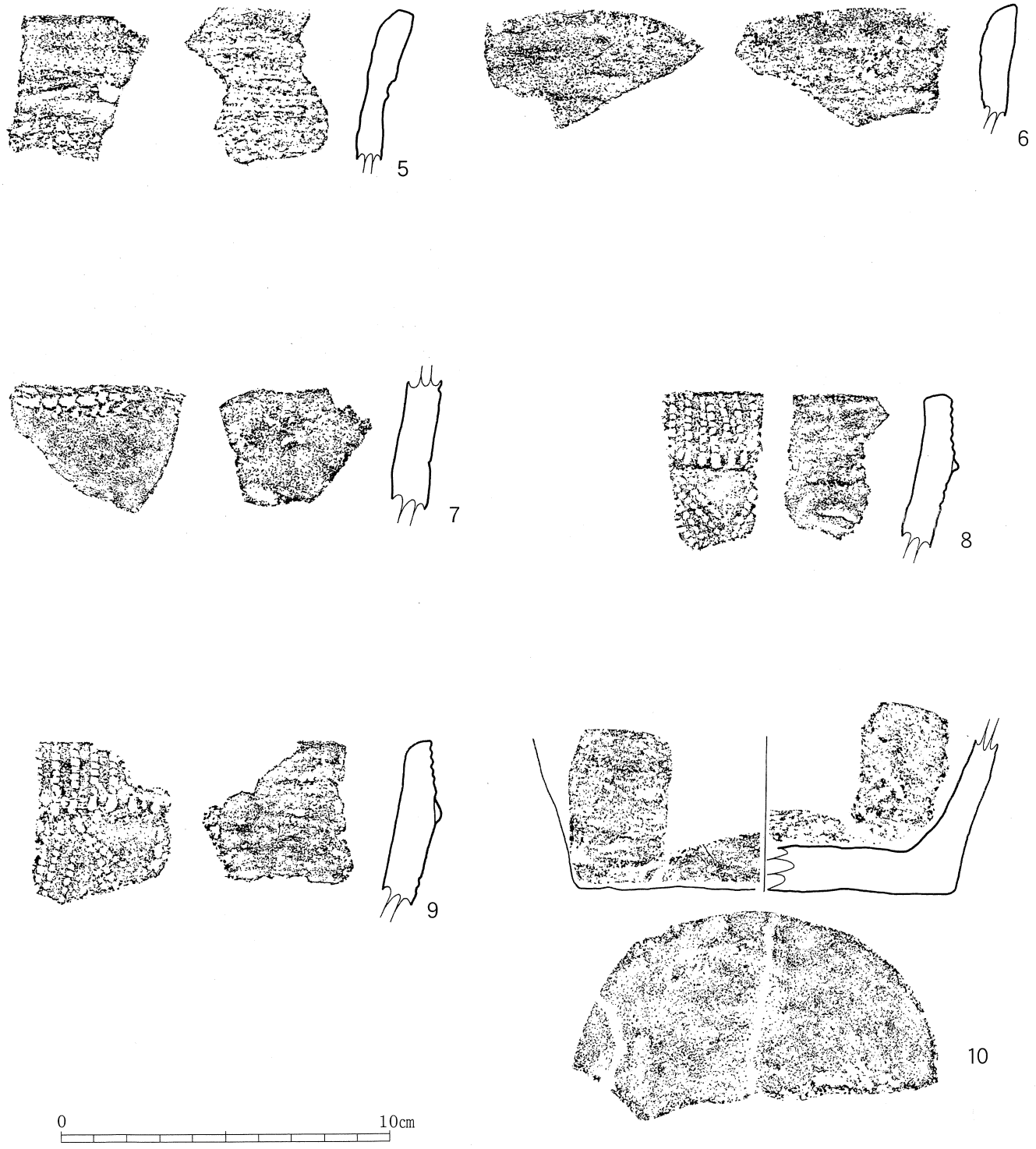


0　10cm

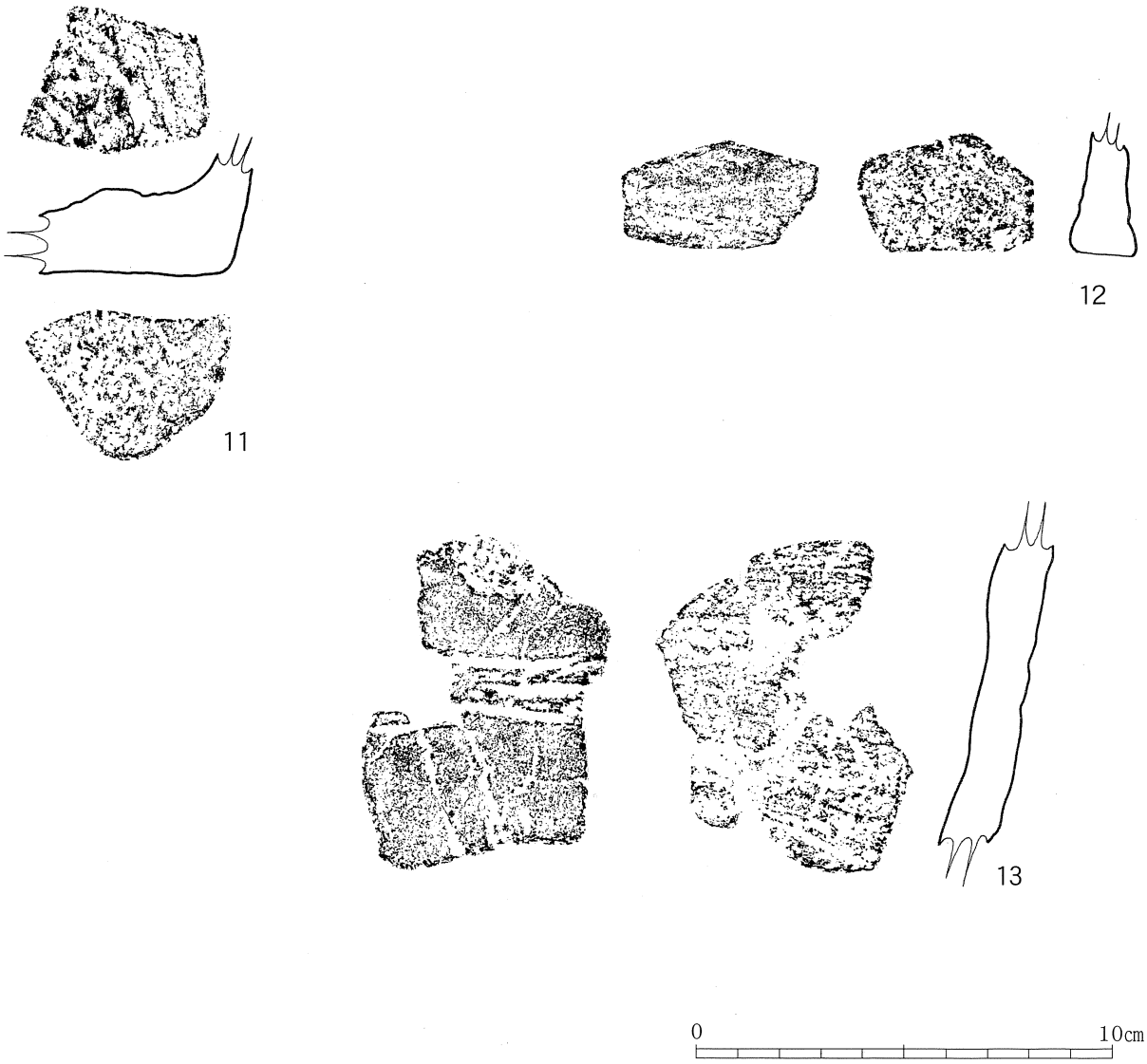
第15図　出土土器（1）



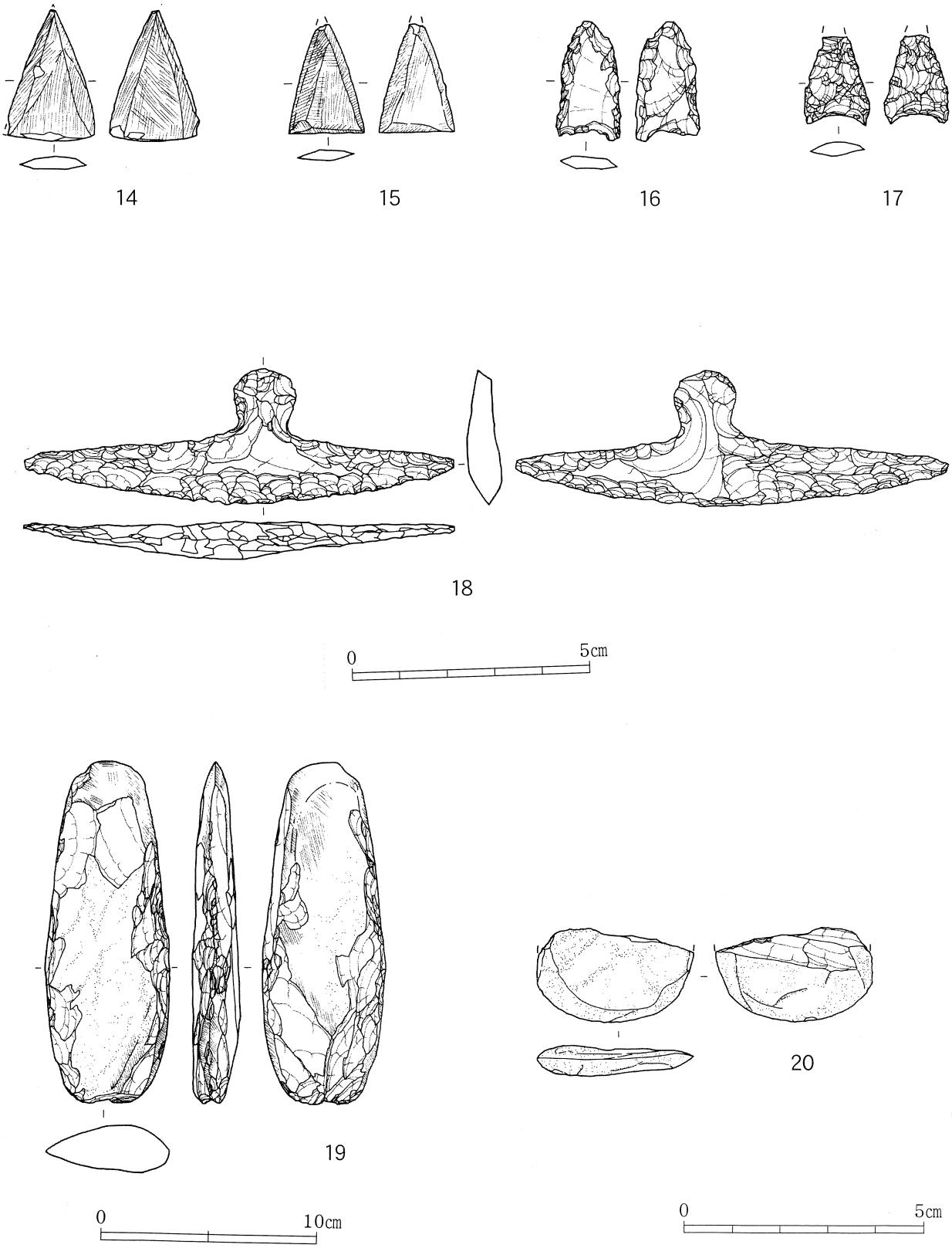
第16図　出土土器（2）



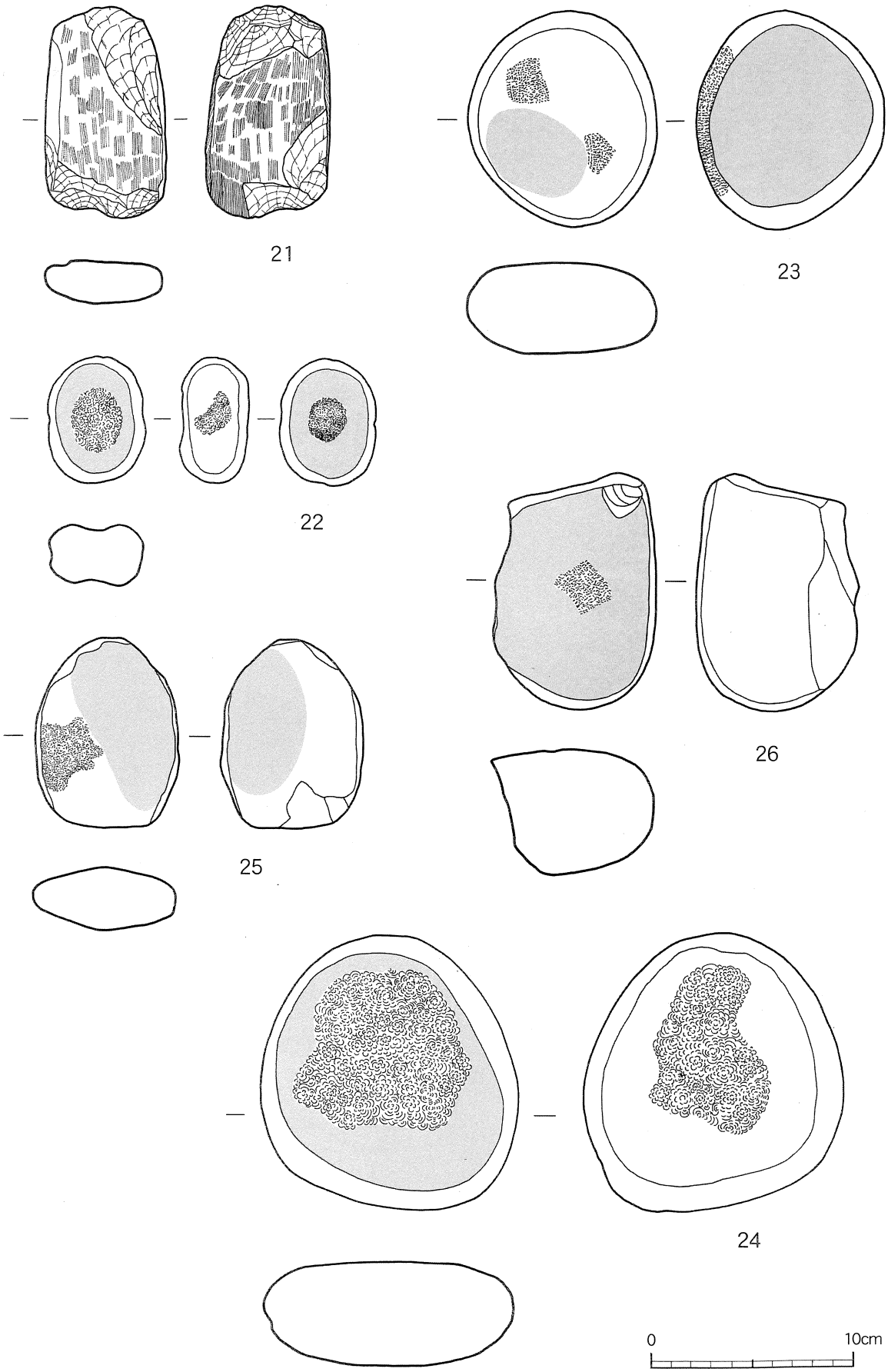
第17図　出土土器（3）



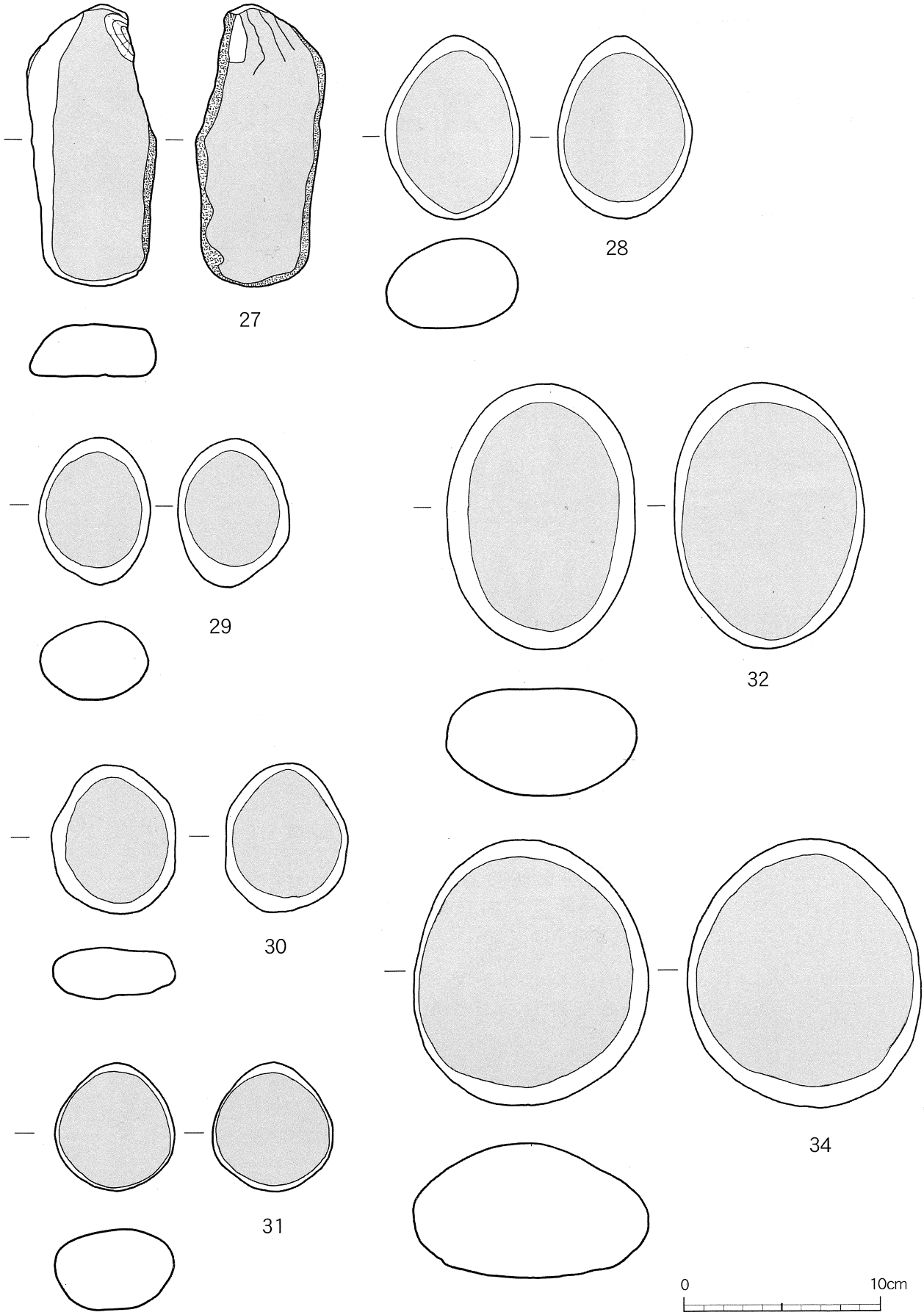
第18図　出土土器（4）



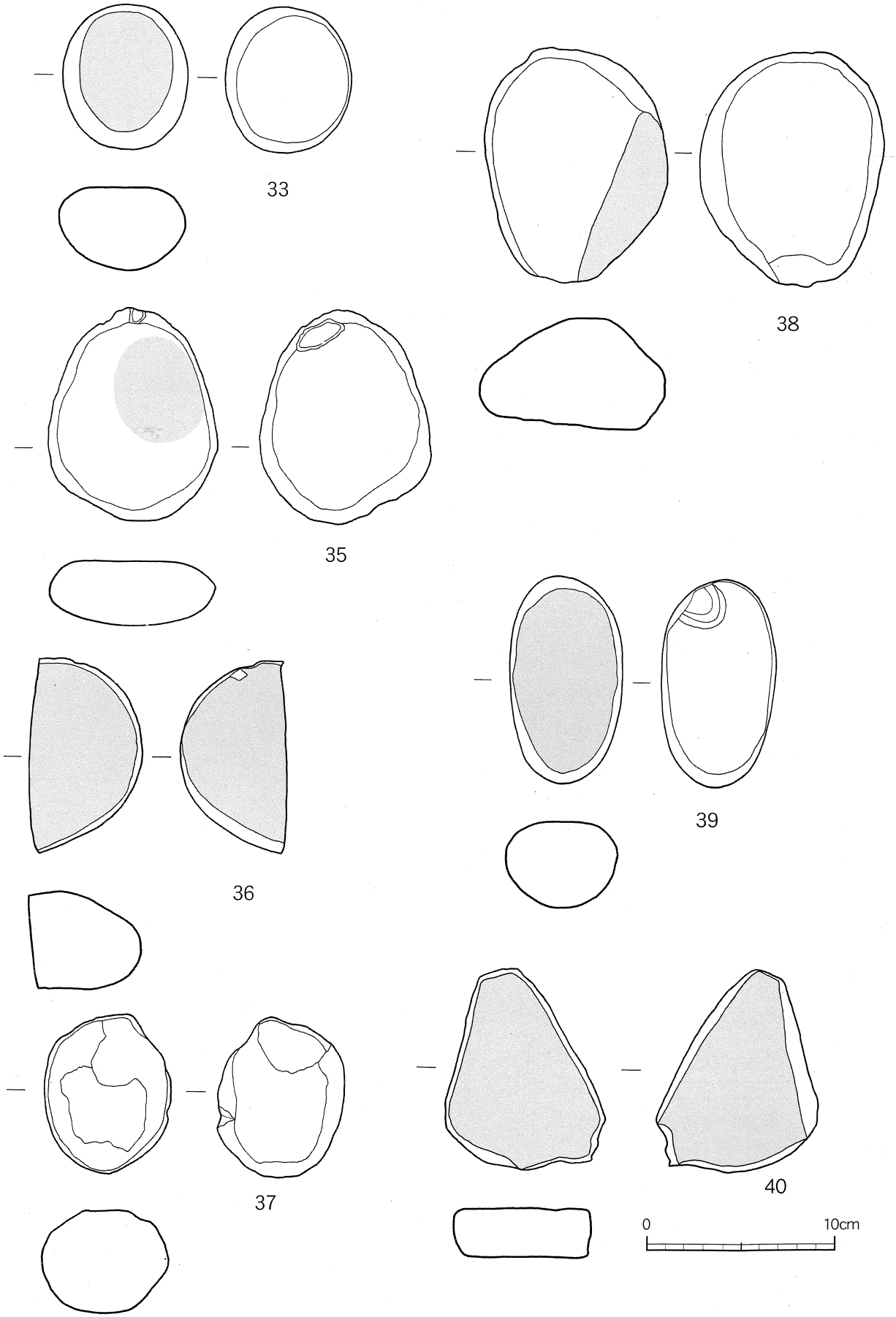
第19図　出土石器（1）



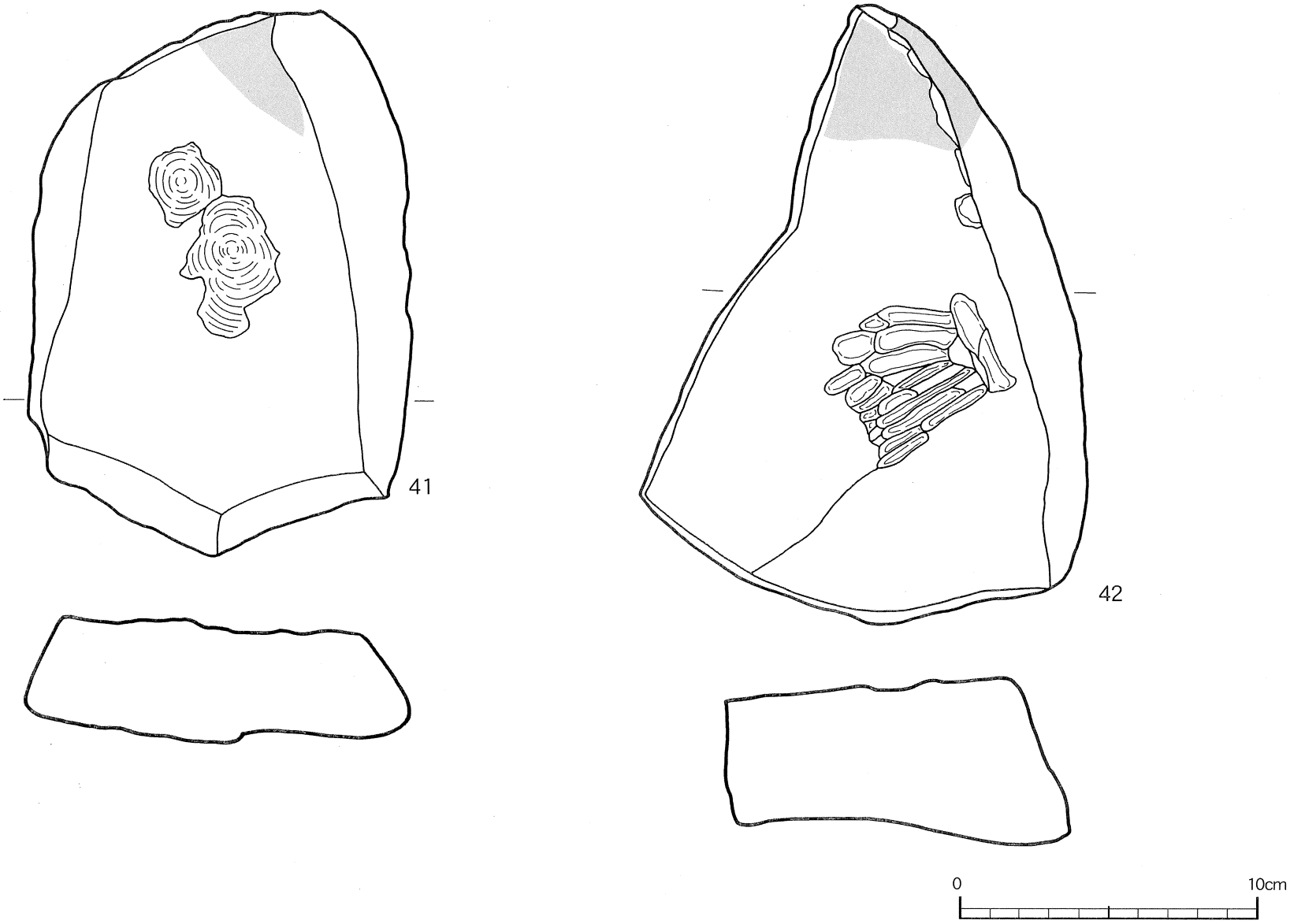
第20図　出土石器（2）



第21図　出土石器（3）



第22図　出土石器（4）



第23図　出土石器（5）

第２表　土器観察表

挿図	番号	取上番号	色調 外面	色調 内面	胎土	備考
15	1	17/77	乳茶褐色	乳茶褐色	石英・長石・砂粒	口縁
	2	69	灰黄茶褐色	灰黄茶褐色	石英・長石・砂粒	口縁・補修孔あり
16	3	28/29/39/172/179	灰茶褐色	茶褐色	石英・長石・砂粒	胴部
	4	38/54	乳茶褐色	灰黄茶褐色	石英・長石・砂粒	口縁
17	5	26	乳茶褐色	灰黄茶褐色	石英・長石・砂粒・雲母	口縁
	6	170	灰黄茶褐色	灰黄茶褐色	石英・長石・砂粒・雲母	口縁
	7	220	乳茶褐色	灰黄茶褐色	石英・長石・砂粒	胴部
	8	185	赤茶褐色	黒茶褐色	石英・長石・砂粒・雲母	口縁
	9	127	赤茶褐色	灰茶褐色	石英・長石・砂粒・雲母	口縁
	10	224/232	灰黄茶褐色	灰黄茶褐色	石英・長石・砂粒・雲母	底部
18	11	16	赤茶褐色	灰赤茶褐色	石英・長石・砂粒・雲母	底部
	12	223	赤茶褐色	灰褐色	石英・長石・砂粒・雲母	底部
	13	188	赤茶褐色	黒茶褐色	石英・長石・砂粒・雲母	胴部

● 出土層は全てⅣ層である

第３表　石器観察表（１）

挿図	番号	器種	取上番号	出土層	最大長 cm	最大幅 cm	最大厚 cm	重量 g	石材
19	14	石鏃	139	Ⅳ	2.20	1.80	0.30	1.31	頁岩
	15	石鏃	105	Ⅳ	2.25	1.60	0.21	0.69	頁岩
	16	石鏃	187	Ⅳ	2.45	1.35	0.30	1.07	頁岩
	17	石鏃	213	Ⅳ	1.85	1.30	0.30	0.73	チャート
	18	石匙	247	Ⅳ	2.75	8.80	0.80	8.74	ホルンフェルス
	19	石斧	9	Ⅳ	15.70	5.70	2.15	258.00	ホルンフェルス
	20	石斧	51	Ⅳ	4.30	7.20	1.40	43.33	ホルンフェルス
20	21	石斧	確認調査	Ⅳ	10.40	6.00	2.00	213	頁岩
	22	磨石・敲石	53	Ⅳ	6.30	3.50	3.00	140	砂岩
	23	磨石・敲石	138	Ⅳ	10.85	9.40	4.45	650	砂岩
	24	磨石・敲石	3	Ⅳ	13.70	12.70	5.21	1325	砂岩

第４表　石器観察表（２）

挿図	番号	器　　種	取上番号	出土層	最大長 cm	最大幅 cm	最大厚 cm	重量 g	石　材
20	25	磨石・敲石	8	Ⅳ	9.50	7.02	3.22	295	砂岩
	26	磨石・敲石	60	Ⅳ	11.41	8.52	6.25	788	砂岩
21	27	磨石・敲石	279	Ⅳ	14.55	6.45	2.65	395	砂岩
	28	磨石	297	Ⅳ	9.52	7.00	4.60	430	砂岩
	29	磨石	284	Ⅳ	7.63	5.88	4.10	210	砂岩
	30	磨石	267	Ⅳ	7.70	6.47	2.78	185	砂岩
	31	磨石	151	Ⅳ	6.64	6.10	4.10	215	砂岩
	32	磨石	2	Ⅳ	13.20	9.80	6.02	1045	砂岩
22	33	磨石	278	Ⅳ	7.85	6.86	4.55	360	砂岩
21	34	磨石	1	Ⅳ	13.88	12.00	6.88	1450	砂岩
22	35	磨石	245	Ⅳ	11.52	9.11	3.55	450.7	砂岩
	36	磨石	133	Ⅳ	10.50	6.17	5.23	435	砂岩
	37	磨石	120	Ⅳ	8.54	6.88	5.64	430	砂岩
	38	磨石	160	Ⅳ	12.53	9.80	6.00	920	砂岩
	39	磨石	192	Ⅳ	10.72	6.55	5.11	475	砂岩
	40	磨石	117	Ⅳ	10.63	8.61	3.03	380	砂岩
23	41	台石	112	Ⅳ	17.55	12.54	4.52	1154	砂岩
	42	台石	230	Ⅳ	20.7	14.8	5.77	1850	砂岩

第Ⅳ章　科学分析

年代測定については，２号集石内採取炭化物についてパリノ・サーヴェイ株式会社が分析を行った。以下については，表題の一部のみを変更して，各報告書の原文を掲載することとする。

牧野遺跡から出土した炭化物の放射性炭素年代測定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

牧野遺跡は，鹿児島県西之表市東南部安城地区平山の標高57ｍの台地上に立地する。今回の発掘調査により，集石７基・配石８基が検出され，土器片・石斧・石鏃・石匙・磨石・敲石・台石類などが出土している。今回の分析調査では，２号集石内から採取した炭化物を対象に放射性炭素年代測定を実施し年代に関する情報を得る。

１．試料

試料は，縄文時代早期とみられる２号集石遺構内から採取した炭化物１点である。なお，遺構はアカホヤ火山灰層下位のベージュ色粘質土より検出された。

２．分析方法

測定は株式会社加速器分析研究所の協力を得て，ＡＭＳ法により行った。なお，放射性炭素の半減期はＬＩＢＢＹの半減期5,568年を使用する。また，測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり，誤差は標準偏差（One Sigma）に相当する年代である。なお，暦年較正は，RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4・4（Copyright 1986-2002 M Stuiver and PJ Reimer）を用い，いずれの試料も北半球の大気圏における暦年校正曲線を用いる条件を与えて計算させている。

３．結果

結果を表１・２に示す。試料の測定年代（補正年代）は，6840BPを示す。既存の九州地方における縄文土器型式と放射性炭素年代との対応関係（キーリ・武藤，1982）によれば縄文時代早期の年代は8500～6000BPとされている。今回の測定値は縄文時代早期に相当し，試料の出土層準をはじめとする考古学的所見ともほぼ調和的である。

今後，同一遺構・同一層準から出土した炭化物等の測定点数を増やすことにより，さらに詳細な年代資料が得られると思われる。

引用文献

キーリＣ．Ｔ．武藤　康弘，1982，縄文時代の年代縄文文化の研究１縄文人とその環境，雄山閣，246-275

表1．放射性炭素年代測定結果

試　料　名	試料の質	補正年代 BP	δ13C　(‰)	測定年代 BP	Code.No.
2号集石内炭化物	炭化物	6840±40	−26.04±0.64	6860±40	IAAA-41057

1) 年代値の算出には，Libbyの半減期5568年を使用。

2) BP年代値は，1950年を基点として何年前であるかを示す。

3) 付記した誤差は，測定誤差δ（測定値の68％が入る範囲）を年代値に換算した値。

表2．暦年較正結果

試　料　名	補正年代 BP	暦年較正年代（cal）		相対比	Code.No.
2号集石内炭化物	6840±43	cal BC 5,766-cal BC 5,764 cal BC 5,744-cal BC 5,663	cal BP 7,716-7,714 cal BP 7,694-7,613	0.024 0.976	IAAA-41057

1）計算には，RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4(Copyright 1986-2002 M Stuiver and PJ Reimer)を使用。

2）計算には表に示した丸める前の値を使用している。

3）付記した誤差は，測定誤差σ（測定値の68％が入る範囲）を年代値に換算した値。

第Ⅴ章　調査のまとめ

第１節　遺構

遺構は集石が７基，配石が８基検出された。調査面積の割にはかなりの数の遺構を検出した。検出面は全て第Ⅳ層である。全ての集石は構成される礫が熱を受け赤化し，熱破砕も見受けられた。２号集石は掘り込みが確認された。また周辺，及び掘り込み内から炭化物が検出された。この炭化物は年代測定を行っている。１号・２号・５号集石は礫がぎっしりと中央部に詰まった状態であったが，３号・４号・６号・７号集石は礫の配置がばらけた状態であった。本来，礫が詰まった状態であったものが，崩壊したものと思われる。全ての集石で構成される礫の石材は砂岩であった。配石としたもののうち，１～３号・５号は集石とするか配石とするか判断に迷ったが，検出状況から配石とした。配石で掘り込みが確認されたものは無かったが，２号配石内から炭化物を検出した。他の配石からは炭化物は検出されていない。礫の石材は全て砂岩であった。

住居址，柱穴，竪穴状遺構，土坑などの生活遺構は今回の調査では検出されなかった。

第２節　遺物

土器は無文，貝殻文系の土器が主に出土した。土器の出土状況は主に北側よりに集中する。出土した土器の量は少なく，また磨耗しているものや小片が大多数を占めた。文様では無文・貝殻条痕文・貝殻刺突文・沈線文の土器が出土しているが，全ての土器において，出土量が少ないため，時間差や出土の分布域に偏在性を伺うことは困難であった。１・２は無文の土器であり下半が若干すぼまっていく深鉢形土器になる。特に内面の調整が粗いのが特徴的である。本市の縄文時代早期の調査で無文の土器が出土した例は少なく，類例が増えるのを待ちたい。８・９は器形がバケツ状になるもので，貝殻刺突文を施し，口縁中位部分に横長の瘤状突起がみられることから，下剥峯式土器の範疇に入るものと思われる。10・11も施文から下剥峯式土器の底部と思われる。

石器類は石鏃・石匙・磨製石斧・磨石・敲石・台石が出土していることから，遺跡を形成した人々が狩猟採集生活を営んでいたことが想像される。土器に比べると石器の出土量は多いが，出土したものは磨石・敲石類が大部分を占め，自然礫も見られた。出土の分布は調査地内に散在した状態であり，著しい偏在性はない。石材は磨石・敲石・台石類は全て砂岩であるが，石鏃・石匙・石斧は頁岩やホルンフェルスが用いられている。黒曜石や石核・剥片類は出土していない。石鏃は縄文時代草創期の鬼ケ野遺跡（西之表市）から約400点を超える量の出土例があり，また隣接の縄文時代早期の多数の遺跡からも数点は必ず出土している状況である。出土した石鏃のなかには磨製のものも含まれている。これらのことから狩猟具としての石鏃が縄文時代草創期・早期にかけて島内で卓越して発達していったことが考えられる。

第３節　総括

遺跡は海岸部に近い台地の先端部に形成されている。周辺には小川が流れ，遺跡の東側には太平洋を望むことができる。分布調査では縄文時代早期の土器片とともに１点だけ隆帯文土器片が採集された。よって，縄文時代草創期の文化層が存在する可能性があったが，今回の調査では確認されなかった。しかし，調査地外の周辺部に存在する可能性もある。

石器の主体となる磨石・敲石・台石類の石材は周辺の小川・隣接する海岸部に露出しており，入手は容易にできたと思われる。また水を確保するのにも適した場所である。これらの条件がそろっていたことにより，この地に遺跡が形成されたと思われる。遺構は集石・配石が15基検出された。構成される礫は全て砂岩であり，７・８号配石以外の遺構は礫が熱を受け赤化したり，熱破砕を受けているものもみられ，また周辺に炭化物が検出されたことから，調理場として利用されたものと思われる。しかしながら，これらの遺構が同時期に形成されたものか，ある程度の時間差があったのかは今回の調査で明らかにすることはできなかった。住居址・竪穴状遺構・土坑などの生活遺構等は検出されなかった。

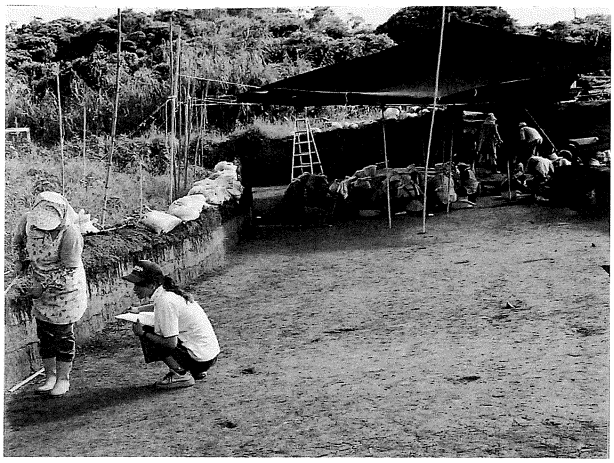
年代測定は２号集石内炭化物が補正年代で6840±40ＢＰが出ており，暦年較正年代で紀元前7716年－7613年（calＢＣ以下略）が出ており，縄文時代早期の年代を示すものである。今後も遺構内炭化物，土器付着炭化物の暦年較正年代資料を増やし検証を行っていかねばならない。

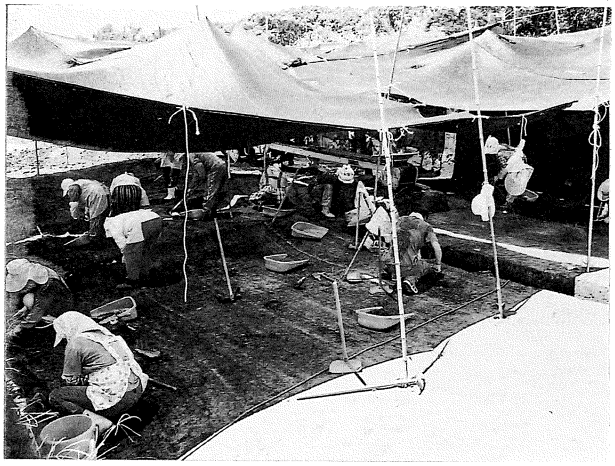
土器は無文・貝殻文系の土器が出土したが，出土量は少なくまた小片等が多かった。下剥峯式土器が出土している。石器では石鏃が４点出土した。磨製・打製がそれぞれ２点ずつである。打製石鏃には基部に抉りがあり，磨製のものはほぼまっすぐであるという特徴がみられる。石鏃は平成13年に調査を行った縄文時代草創期の鬼ケ野遺跡（西之表市）から400点を超える量の出土があり，西之表市東南部地区で近年調査を行った縄文時代早期の数箇所の遺跡からも数点の石鏃出土の報告例があり，石鏃の出土しない調査地は皆無といってよいぐらいである。平成17年度に調査を行った縄文時代早期の三本松遺跡（西之表市）からは姫島産黒曜石の石鏃，石核，チップ類が多数出土し石材を持ち込んで製品を作っていたことが明らかとなってきている。このようなことから島内において縄文時代草創期から早期にかけて中小動物類の狩猟を行うため石鏃が卓越していた事が考えられる。石匙・石斧・磨石，敲石類・台石等も出土していることから，木材の伐採や加工を行い，植物性食料を摂っていたことが伺われる。

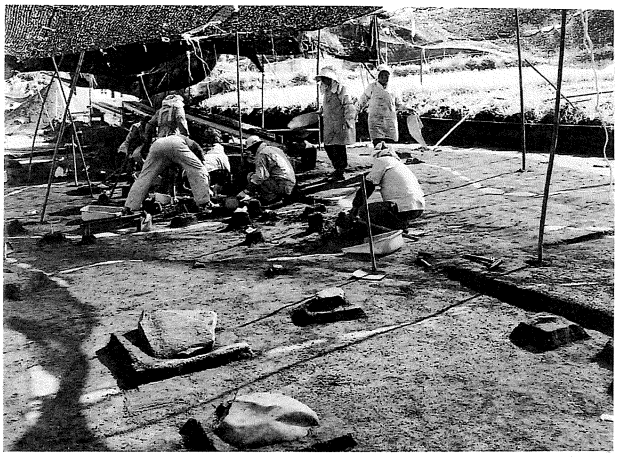
遺構から遺跡を形成した人々がこの地に定住していた可能性も考えられるが，生活遺構が検出されなかった点，土器の出土が少なかった事など，定住を証明する明確な資料に乏しい。あるいは，季節的な回帰場所または逗留地とも捉えることができるが，現段階ではそれらを証明することは困難である。しかしながら，今回の調査結果からは，一定期間だけこの地に留まった遺跡である可能性が高い。

写真図版

図版 1

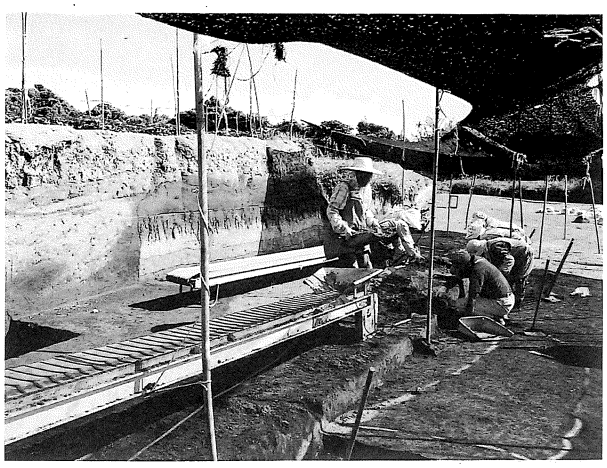


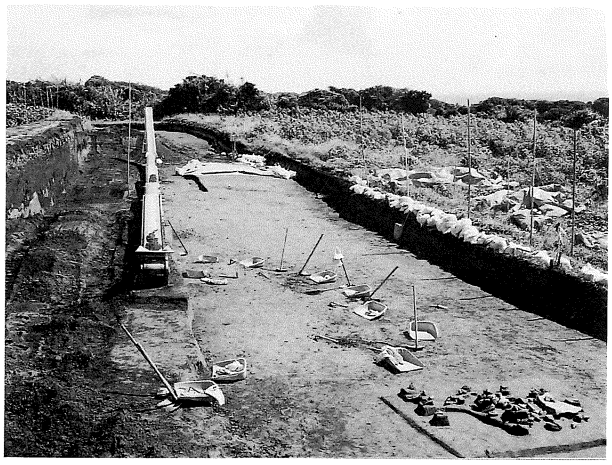




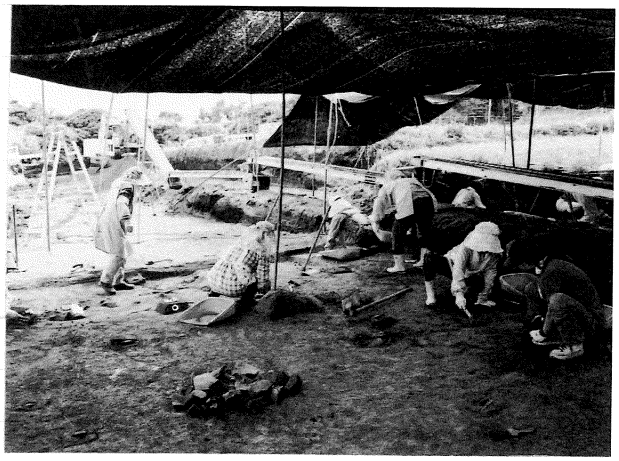
調査状況（1）

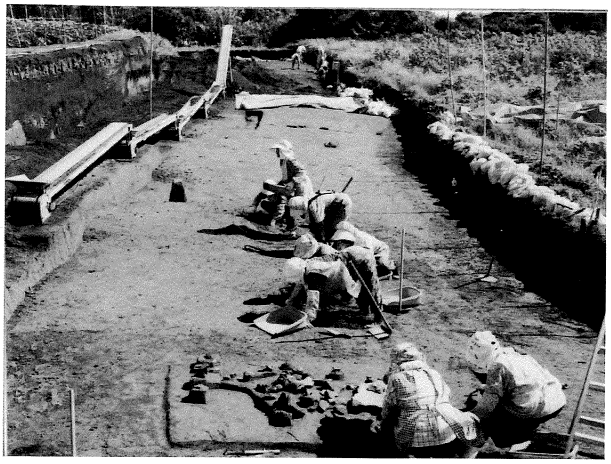
図版 2



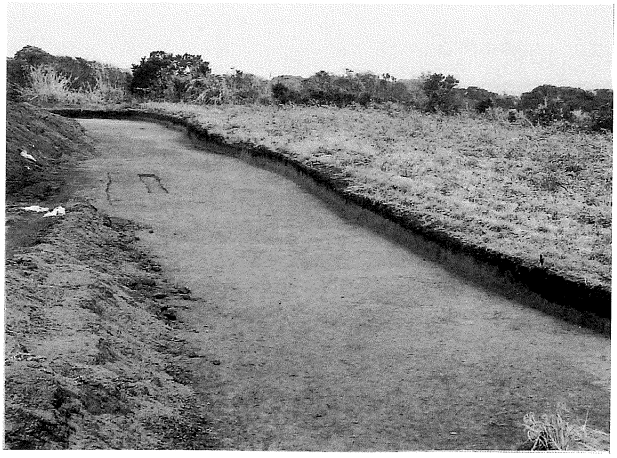


調査状況（2）



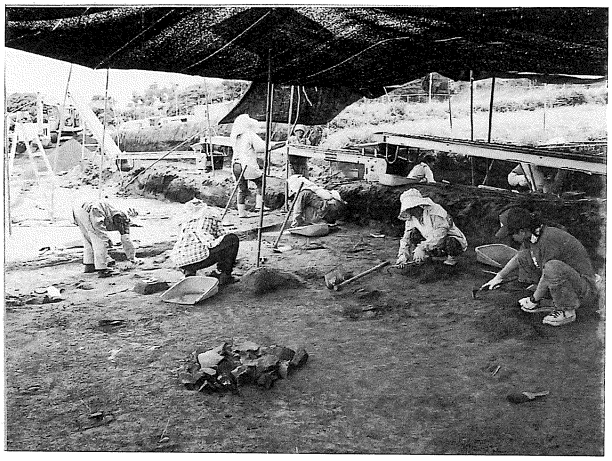


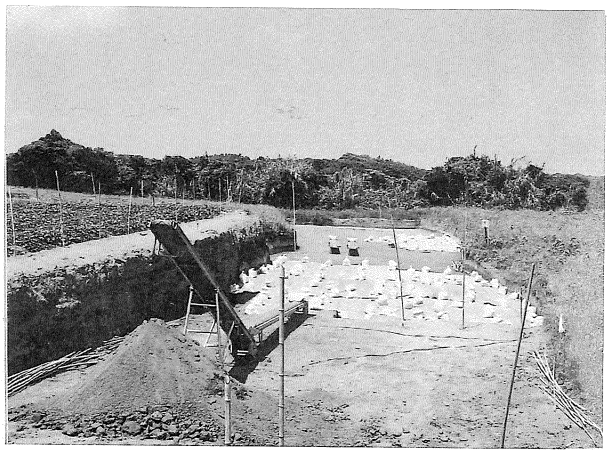
調査状況（3）



土層断面

図版４



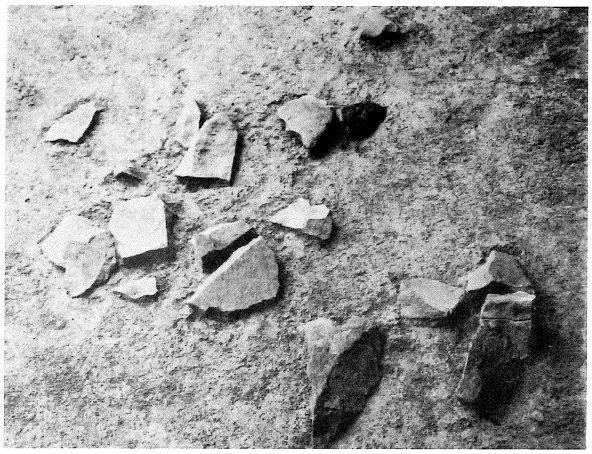


調査状況（４）

発掘調査作業員の皆さん

1 号集石

2 号集石



3 号集石

4 号集石

5 号集石

6 号集石

集　石

図版 6

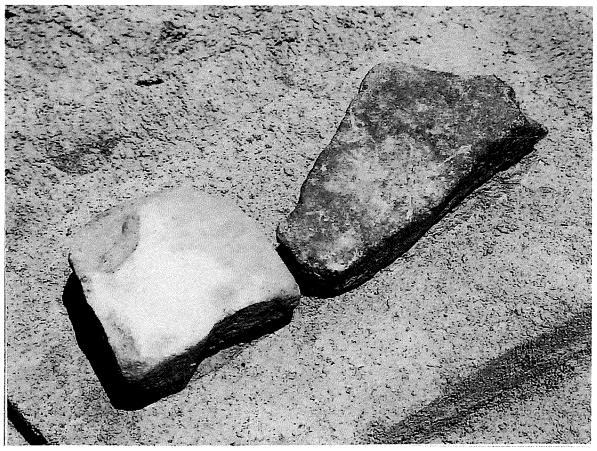
1 号配石

2 号配石

3 ・ 4 号配石

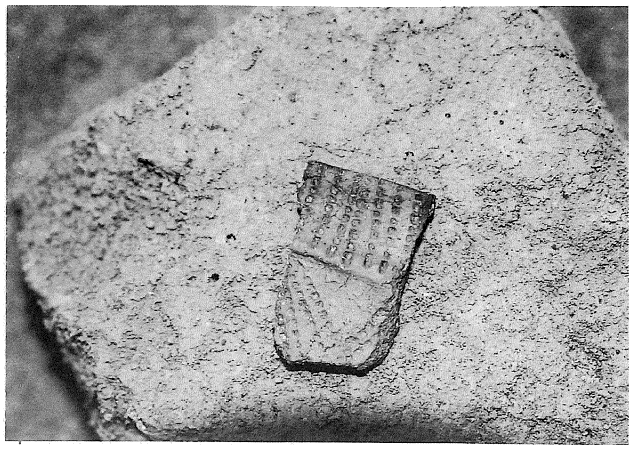
6 号配石

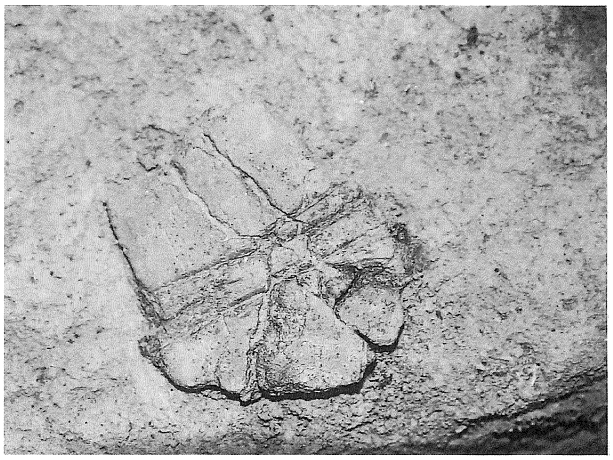
7 号配石



8 号配石

配　石



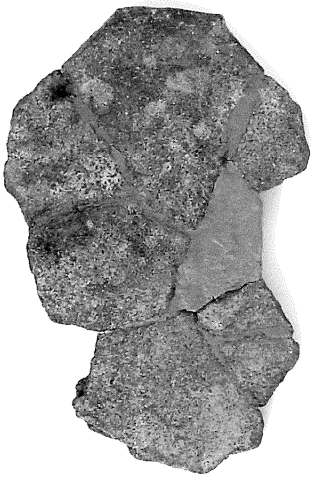


遺物出土状況（1）

図版８

遺物出土状況（２）

1



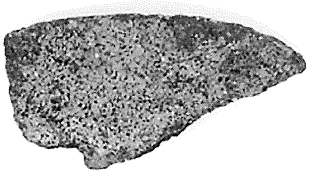
2

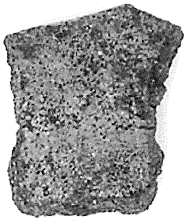
4

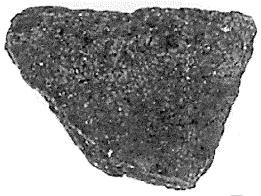
3

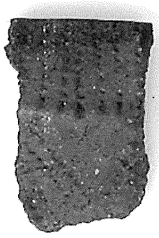
出土遺物（1）

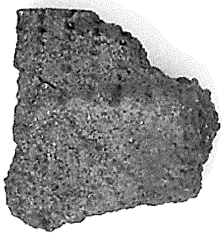
図版 10


6


5


7


8


9

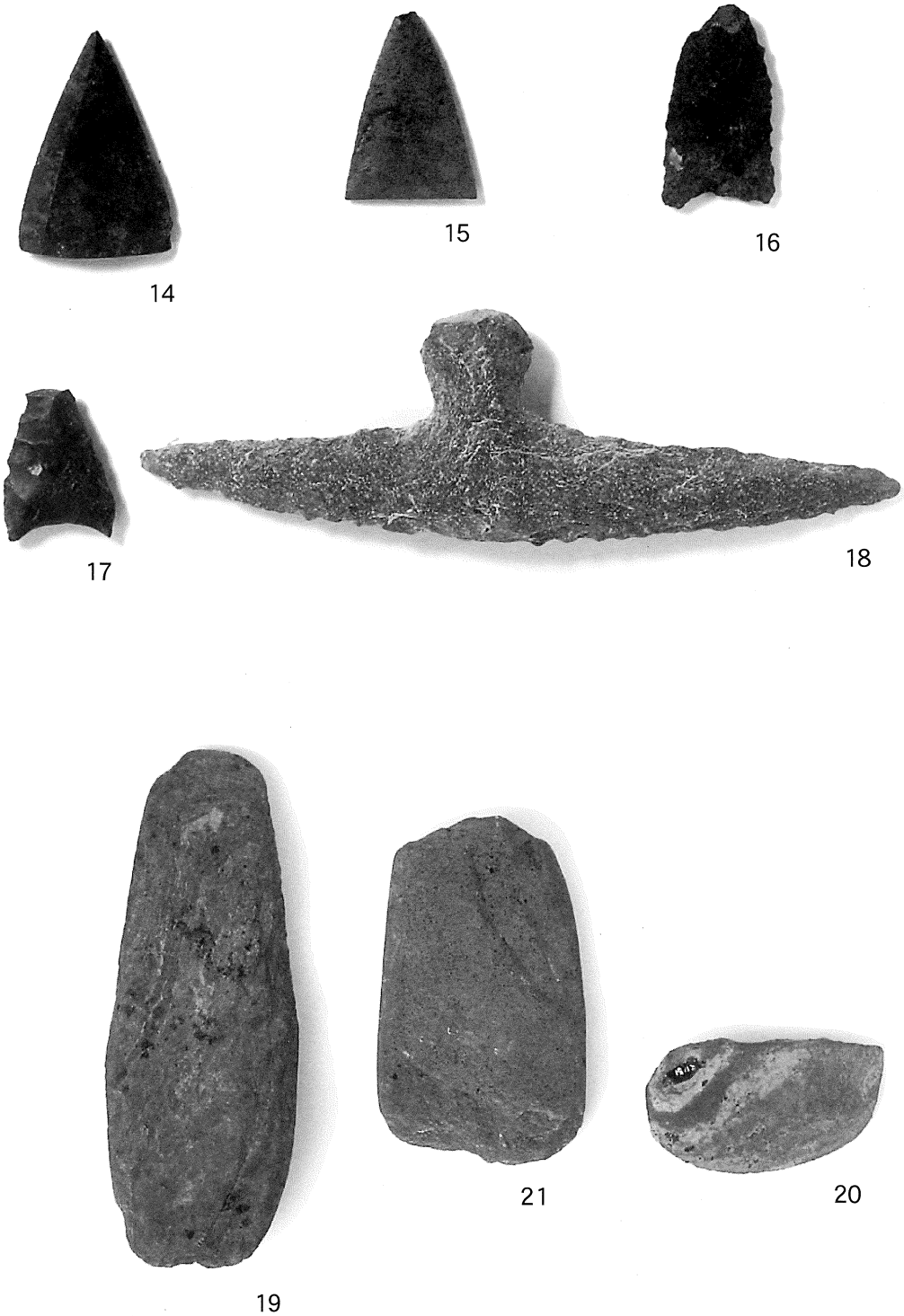
13

10

11

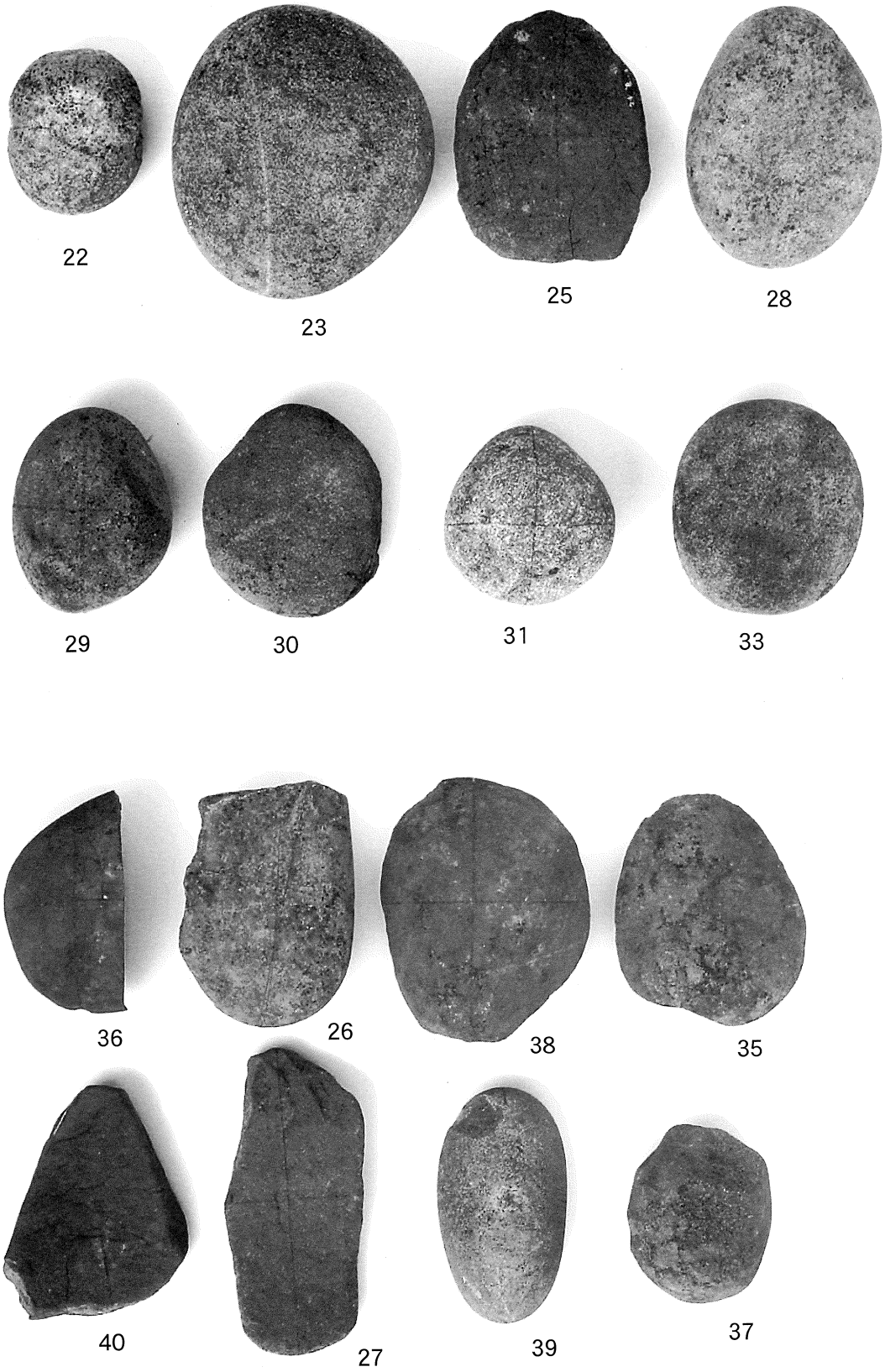
12

出土遺物（2）

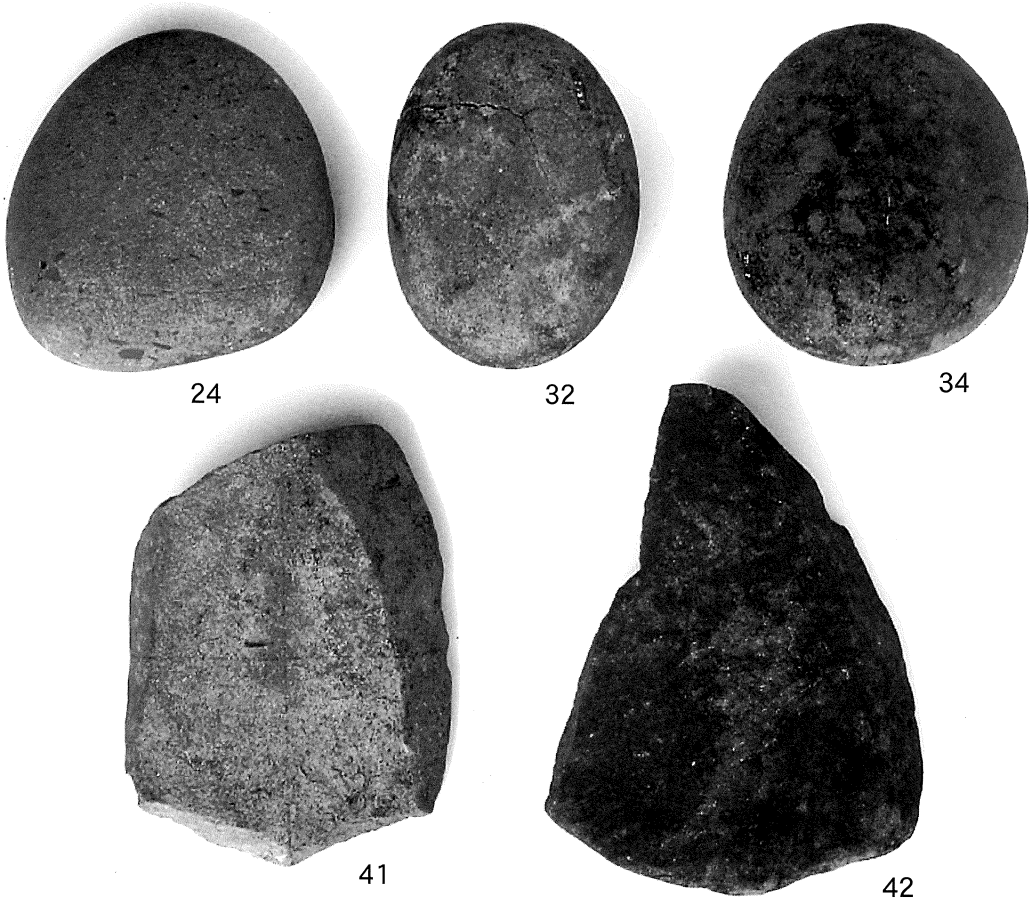


出土遺物（3）

図版 12



出土遺物（4）



出土遺物（5）

西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書（16）

牧 野 遺 跡

発行日　平成18年3月
発　行　鹿児島県西之表市教育委員会
〒891-3193　鹿児島県西之表市西之表7612番地
TEL ０９９７－２２－１１１１
印　刷　（有）種子島新生社印刷
〒891-3101　鹿児島県西之表市西之表16736-1
TEL ０９９７－２２－０４７６